

俳家奇人談上中下全冊



天保壬辰秋講

蓬廬青々山人著
八采園寥松老人補校

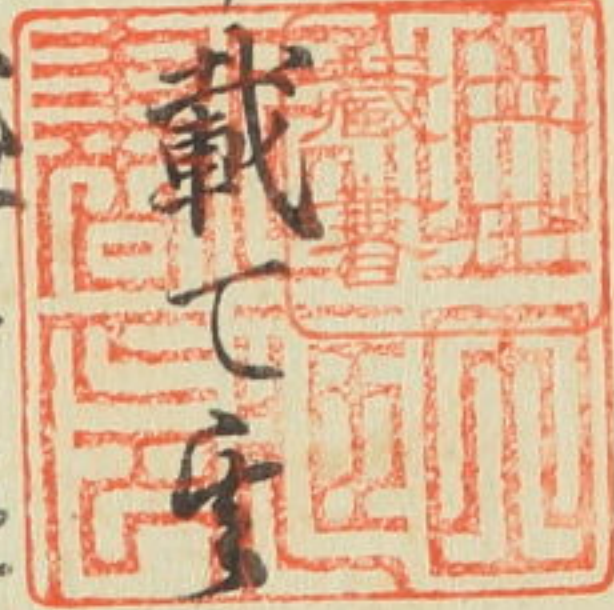
俳家奇人談

東京書肆

寛裕舎藏

刻俳家奇人談序

曩小閑田子近世畸人談集録



載て予出で詳々

友里來者何れといへども復そ其盛を繼ぐものあり

竊り、惟みるに永正天文の比小守武宗經此清標

あり寔永正保名中より貞徳季迄の卓犖あり延

宝元祿の間小宗因桃青此逸群有り且全一編哉

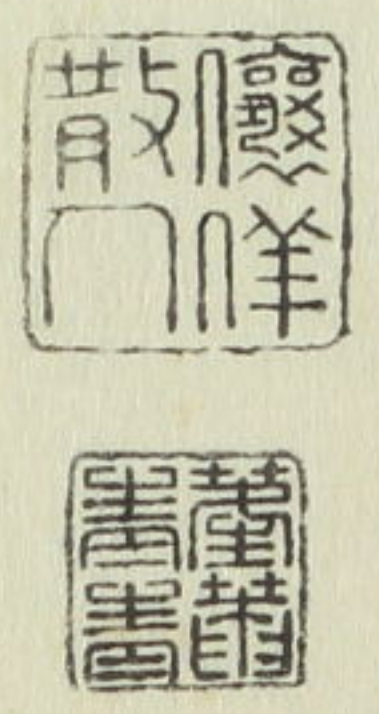
貞室立圃重粒信徳言水其南嵐雲玄末文竹支考

件六北枝燈籠來山鬼費乙由不角原松淡淡等此一奇

ありく予乃小雜出する所の俳家も亦その人なりと

いふはるるに茲又先人玄玄一遺稿あり能奇哉好む
者の為小輯す亦る八十有餘法其要とらるや古人
此の如く採擷て高るを知る一由又各句に其風韻の
を識すふ有り今也四里に題一之を能家奇人陸と
いふ後來名種客幸と漆桶摸索此羅漢唱ずんハ僕
嘗躍ゆるり是う一志如んや予肯文化丙子名歲
初春筆歴小筆を採録

懷倅閑人書香



俳家奇人談序

倅歌者詞雅而俳句者詞俗也此之彼詩
與談談者俗而叶音詩者雅而有韻固其
自然也余謂雅俗異其詞體裁遂別文質
已定而意趣亦互有優劣其感鬼神動人
情固同之若其詠之人意有雅俗而其發
言不同是故倅歌與詩固雅而詠有俗者
俳句與談固俗而發有雅者則雅與俗不

可以詞害其意也。竹內句當玄玄一者，所謂目雖盲不盲于心，而居常好俳句，其詠四時景象，言人事，喜戚閒遠之趣，淡薄之味，往往使人有無限可感者，不為不多矣。纂而輯之，名曰詠物句選。云玄玄一嘗曰：古人之言俳句者不少，而欲尚友其人，則不可不知其意，匪事蹟也。於是乎廼撰有其美名佳句，而事之可以賞者，而遂成編。

名之曰俳家奇人談。其子再按而刻之，以繼其父之志。豈不懿哉。苟世之言俳句者，讀之辨，今古之文質，知意趣之雅俗，則有復裨益于風教，亦以為不少矣。古人有言云：誦其詩，讀其書，不知其人，而可乎？是以論其世，是尚友也。玄玄一其有感于此者也乎？是為序。

文化乙亥秋九月既望

江都 卧舫散人譚



よきを伴ふるをきよきとて色おまへ
 西上人のよきつゝをれいひきりて
 世にあはれしははるきりてのなきは
 ありよおれをおもひ侍りけりわら
 ちはものき又伴ふ一時猶おれぬ
 年以厘子かくもててそ文昭なり
 けまのきき傳をききてそ業をほ
 りておれあはれて感をききりて
 たりておれあはれて感をききりて

ちきりてをわたりしむるも此等より士やよく
 心を平つて物観るべきありしむるに象年を
 けらりて書きたるは本は信言をわたりしむる
 事の中にも又ある事秋八月その日并語三又
 あらわおもしろしむるは書を結してむるを
 つらういふれしむるは書を結してむるを
 書し本よの深きしむるは書を結してむるを
 纏まきしむるは書を結してむるを
 なる新しむるは書を結してむるを

ちきりてをわたりしむるも此等より士やよく
 心を平つて物観るべきありしむるに象年を
 けらりて書きたるは本は信言をわたりしむる
 事の中にも又ある事秋八月その日并語三又
 あらわおもしろしむるは書を結してむるを
 つらういふれしむるは書を結してむるを
 書し本よの深きしむるは書を結してむるを
 纏まきしむるは書を結してむるを
 なる新しむるは書を結してむるを

可くはるるし 十とハ けり士り舞、也とちるんち
 おまのあまちしとあま一 歌まのしと、まゝとの
 舞のもけ舞まゝとひし、 舞まのあまけとあま
 けしと、まのけしとあまのけしと、あまのけしと
 あまのけしとあまのけしと、あまのけしとあまのけしと
 ほのあまをとあまのけしとあまのけしと

ハ乃亦周宗松



九例

- 一 本文引用する所に出の謂ゆる法儀歌集紀夏雜記名類
 歌く教る能一云事句といへども是を夏河源時ハ求め
 ばといふ事亦一又傳説の正犯と知人ハ控て此を詳に
 一 筆載在する者も上文昭あり下あ亦に對する古今能
 後八十餘家各自の奇形風韻被志らむ
- 一 世出唯傳學小隨く年代此次序又拘らざる且その傳を
 委曲系傳ハ家く此世紀ハゆつまく茲に畧に系あり
 風流を考あてたれハあり
- 一 文章隆然來山捨女千代此屬を此閑田が絶する所と雖亦
 異亦り絶まども生ありや幾審り一見んと絶せば必ら此
 言出と互考すべし

一日才に募て得る交名古画漢短尺出懐等並び了友人
 須古の筆を借依も亦楚北旨忘を解するの一助亦依
 居一也親子人それ諸我恩一

蓬廬書畫識



俳家奇人談目次

上之卷

- 一 宗祇法師
- 一 山崎宗鑑
- 一 杉田金一 附 英津女
- 一 松江重頼 附 春沓
- 一 山中西武
- 一 安原貞室 附 元次
- 一 齋菴徳元
- 一 荒木田守武
- 一 松永貞徳
- 一 野之口左圃 附 學水
- 一 高瀬梅盛
- 一 鶏冠井令徳
- 一 北村季吟 附 湖春
- 一 石田未得 附 未琢

一 高鳴玄札 附 山夕

一 荒木加友

一 半井卜養 附 慶友

一 池田正式

一 芳賀一品

一 中島貞宜 附 二葉

一 神璽忠知

一 田代捨子 附 盤桂禪師

一 池西言水

一 西山宗因

一 井原西雀

一 推中才磨 附 團水

一 田中常矩 附 常長

一 田代松意 附 正友

一 菅谷高政

一 伴友信德

一 上島鬼貫

一 園女 附 惟中

一 小西来山 附 由年

中之卷

一 松尾桃青

一 榎中其角

一 服部嵐雲 附 烈女

一 向井玄来

一 僧文草

一 森川許六

一 東華坊

一 曲翠 附 破鏡

一 惟然坊

一 勾空

一 秋之坊 附 李東

一 磨工北枝

一 僧浪化

一 僧千那

一 小川破笠

一 路通

一 梢風尼

一 智月尼 附 乙州

一 鯉屋杉風

一 燈坡

一 越智越人

一 涼菴

一 曾良

一 原田守古

一 知足一家

一 生駒萬子

一 山口素堂

下之卷

一 中川乙由

一 舍羅

一 瀧川坊

一 高聖百室 附 琴風

一 深川湖十

一 秋色 色

一 紀文親子

一 櫻井吏登

一 水間沾徳

一 菊畠沾涼 附 行岩

一 大波三千風

一 立羽平角 附 辰角

一 大高子葉

一 加藤魚松

一 松木涉澄

一 兼畠貞佐

一 活井田室

一 梅路

一 子野色人

一 堀内仙雀

一 千代女 一 山口羅人

一 横井也者 一 清水超波

一 建部浄袋 一 遊女流

通計目次八十有六條

一 玄玄居士略傳 附 今世名家追福發句

佛家奇人談書此上

竹憲玄玄一遺稿 男道庵書事 卷行

宗祇法師

宗祇法師法華年表法宗里一があ依ひと平一 拙く連歌の
まを裁固まり一又惜いう宗宗十年開しり連奇の竹年此
功を積られ元空妙小針里雅一と答ふ雙いはく拙ら十年
登和勤亦不知何と或人大一阿都ましく我が及ぶ西又阿
すと感せしとや漢北相如を口十て始く孝經を讀
唐の高適の六十小一と神て詩裁作依れば世變が連奇
達き一も亦宜あははや亦小伴舟の鬼費も是を稱し
尚時世双ちりや已祀せ至或時近隣は難産阿里りる候ちその
屋は信く一摩河般若はらみ女の奇情う宗宗祇一二七流で

さんさんの綱つなとくと宗長むねなが此こゝ綴つづけるが官くわんち男おとこ子こをお生うせり又
 時とき帝みかどの瘡かさ疾やまひ煙けむりいせ玉たまつるに世よ叟おきなの連つら奇き一いつ世よ全ぜん快かい
 玉たまひ一いつ子こ有り玉たま妙まう境きやう又また入いり死しハ玉たま奇き時ときとほと少すくあふは
 玉たま號ごうを種くさね玉たま唐たう旬じゆん結むす袂たもとといふ何いかまの年とし小こり有ありむ伴ばん秋あき三
 五ご比ひ夜よ一いつ天てん涼りやう雲うんか、里さと月つきの宴えん公こうあふはる我われ歎なげく「云いて世よ
 月つきを曇くもらば今いまあふはる今いま世よ比ひあく人ひとの備いする所ところ有り
 又また連つら懐なご一いつ世よ玉たま娘むすめるハ父ちち不ふ耐たぬの宿やどう念ねん是これ二に條じやう院いん後ご波はの古こ
 奇き不ふ倚よ一いつ吟ぎんあり後ご玉たま慈じ翁おきな室むろに感かん慨がい一いつ世よ此こゝ中ちゆうハ父ちち不
 宗そう祖その者ものあふはる暮くれらりあふは風かぜと少すく老らう海かいの彼かの法はふ沙さ
 成なり宗そう一いつく一いつ生せい此こゝ世よ為なる友とも海かい屋や一いつ世よ傳でんふ父ちち龜かめ二に年ねん
 月つきお沙さ湯たう中ちゆう此こゝ客きやく舎しゃに寂しやくす衆しゆ八はち十じゆ有あり二に世よを辞しす海かいの奇き
 まうあふはる結むす乃の林りんの櫻おうも立たちをくねぬる守まもれと恨うらむ事こと一

○荒本因守武

荒本因守武ハ伊勢内宮の神官あり和歌連奇成好く一時
 小名あり或曰連奇興乃君席と傳ふ法華の人くあはれハ
 古座衣をんまを何れとかみあ伊宗被傷一在く「云とわ
 雲うん此こゝ娘むすめ玉たま烏う帽ぼう子こ着きて二附つら水みづハ殊こと又また興きやう何いか里さとてとんえりる
 嘗あまく童子どうし教けう戒かい此こゝ為なる一いつ夜よ百ひやく首しゆを誦えいず一いつ世よおとに世よ中ちゆう君
 二字成押は是成世中百首といふ又國人尊重して伊勢海
 ことと稱せり且能借此鼻祖あり一元旦や神代のころも思ふに
 一櫻おう子こや雙ふた鈴すず君きみ系けいの落おち種くさねも此こゝ調てう高かう尚かう人ひとの及およびる所ところ後ご多た
 獨ひとり吟ぎんみ句くをちはる空そら雲うん結むす一いつ飛と梅うめや種くさねく一いつ世よと神かみはる今
 多た法はふ篇へん成なり後ご不ふ易えきの什しふ多た一いつ宜よろ味あじ之後のち末すえ至いた一いつ園えんめ等ら名な
 名な家けを出いすも世人成以く勢せい陽やう此こゝ棟とう梁りやうとて志し小こ學がくむ屋や一

守武靈像者募往時所崇於
度會外宮之真而其門

葉之所傳也先乾什

素出其派嘗師命

難點止附與沾測

沾測授之雪齋

後莫知其所在后乾什

素求而得之云為其古物可知也今取

以圖焉

蓬廬書畫



甚小... 河... 句... 文... 年... 八... 月... 卒... 於... 絳... 也... 越... 之... 也... 又... 以... 綽... 神... 迹... 山... 峯... 北... 雲... 風... 穿... の... 松... 風... 穿... 句... 一... 段... 於... 小... 今... 日... と... 凡... 伊... 人... 我... 世... 如... 矣

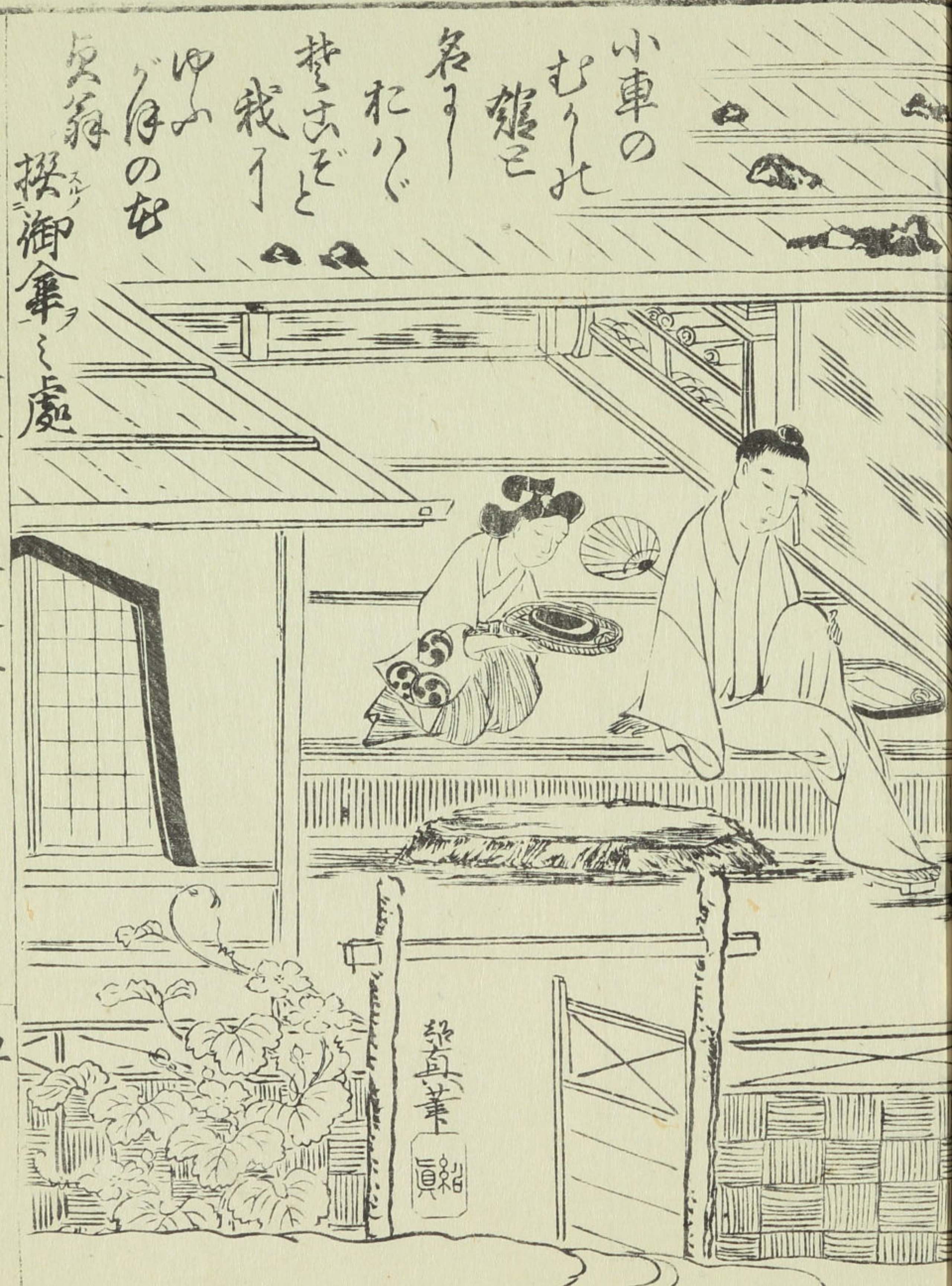
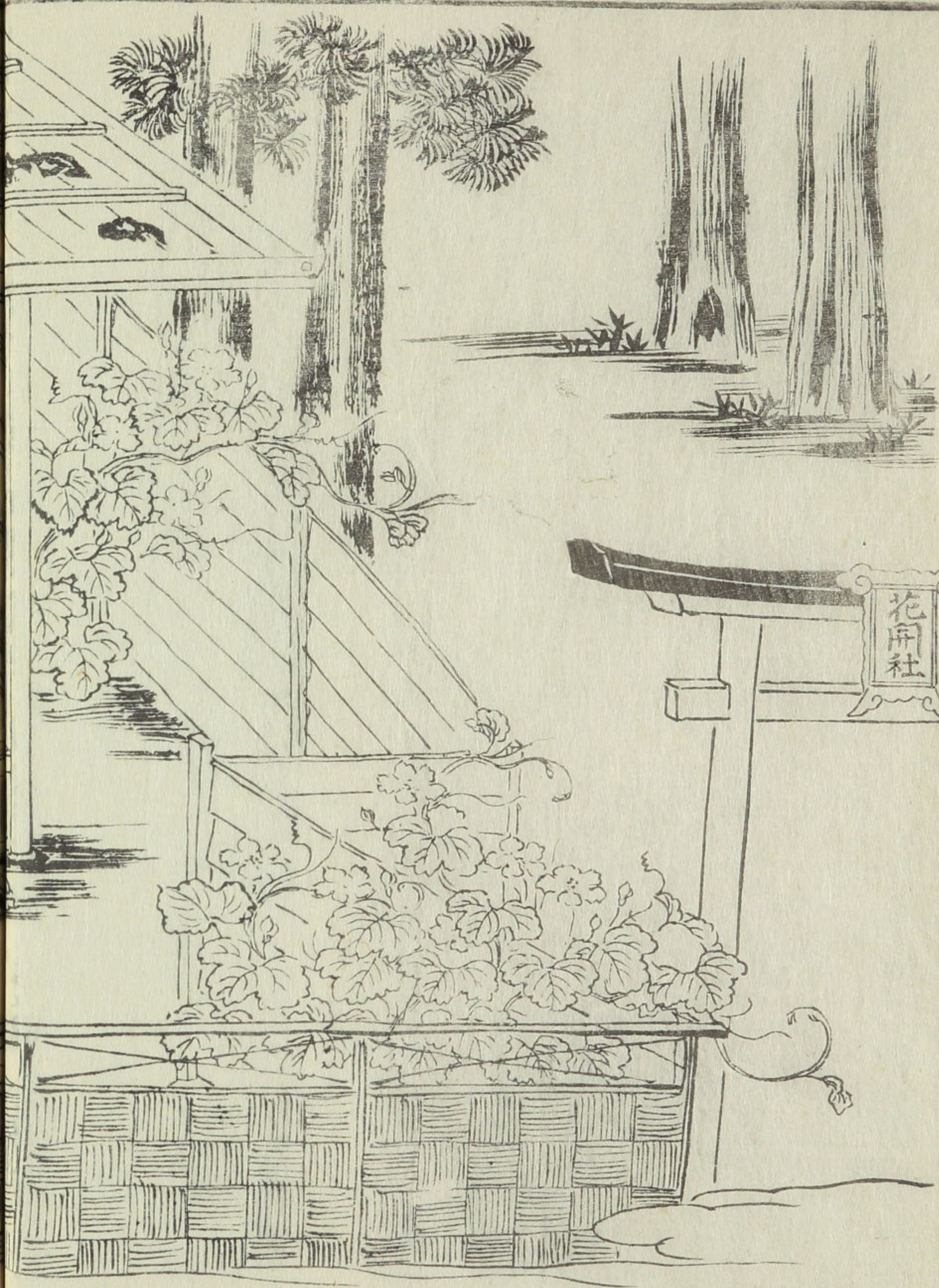
○山崎宗鑑

山崎宗鑑江進江右人本姓支那氏... 長享元年... 追討... 獲利... 延徳元年... 義隆... 後... 山崎北竹林

道原素より和歌連奇不達一又権借も長ざり或時道通院
 駿河陸一宗長諸とも糸協とて為り一巻一ける烟草を抄
 て蘇里のふに法流一と一巻小持する姿を尺寸の録鬼つた
 と異一玉ひる杖一おんとすれど隻の沢水宗長一蛇一追ま
 幸何地くるるらん鑑が才三ふ里案ずるに難後集権借の解田耕等
等みふ得く宮隆公を龍山公より
長う振を澄とち近事誠各吾山あのみ
る彼可穿す清誓を平池を津持とせうはれハ清誓旬在まれ性のはら
 志むる変り或人「尾毛を借小常とくくと為て附句杖全け
 水鳥の尾羽れ束けさ解く又一切くくはあま切あくもふ
 こいくるに三句石坐せり水く「盗杖者一て尺寸バ我子
 はなある月杖かくせ海苔の杖「公よ紀的矢れ少一巻
 彼句はと古雅あり「手杖ついで歌あう「よる杖る「摺小本
 晩年西風一赴く彈治濱海琴山此林麓了止海る飯居一て一
 在唐といふ時ふて文廿二年八十九歳一と一癩を病ぐ死す
 或も其又二年の奴と辞せ「宗温ハいふ人との問あははと
 するふか松振ふり「辞せ「宗温ハいふ人との問あははと
 何至てあはむ人といく「後藤翁その風流を志といふ舊録を
 居く「有るに松姿たのまにかたつた

○松永貞徳

松永貞徳ハ幼名徳徳長一とも程影有杖米収を振を若一旬ら
 味で延陸丸依多長既丸といひ「道通軒と号す冷小和奇連
 成好く玄旨法市を抄り「長嘯子成友と一一年世孫系好
 徳持村を三條の大活又講す活下此豪家何系ある若その
 小振一て今若若若の地を寄附に昔より社あり「何奇
 神此あるり成志の「便ち書琴書杖茲も振す書若若人あ



小車の
むくれ
名
わ
杖
我
や
の
長

撰御筆と處

伊家可成記

卷之四

四

里くはつらつ一句を備す爰はめて思ひらく神託に我道と
 起すぐ一と爰小に小祠を結搦して花開福之何と奉稱す
 賀河比奇一第代をその日の社名奉稱す是内社宮たれ云此社
 及そ此年の秋 云頂あり炬燵意の本此稱を許せしれ初と
 嬌忠虫我あはして此年と名く 天子此年よりして一令多ありと
 此年よりして一令多ありと可第一進刻する所海島
 夕塔の附臨時及不入との譽くき小傍於す時了式我定より始
 附合興行何より一寛之六六年より今至ハ西武にて釈重因如日能
 道長令傳執筆と七人あり 附合 爰句満と正潔なり 秘傳 不
 いづれ始の法の時一餅らせく食ひ立よ念意両一雲月花一度は忍
 へきり子一人の登之麻比種や秋名月一冬びの里土樓まこ穴
 映子夫明の後家重二人あり 殊重満足祝意と名く年長トて
 可算の法有里何其の年一や有けん何有りて竟然秘伝
 大佛殿北南北才許多を湯里くみ月く果樹茂極意
 榜をおして材と名く中報恩花有り綱子に妙經
 千部の子昇成込す翁あり一六奇仙 上宮右子達磨大沙人の世に
 此部或能定家等の六人あり
 像を画くあり吟意所あり詩奇連能者短尺を集む直
 小芦比九屋 兼座を以て 園に通じ方城東西式十百南北三十
 百箇箇難する小皆竹を以ては今園あり字生権根を存
 せり権貴小幸せらるるとは此翁の碩徳あり承意二
 年小致は高八十三辭世の中一昨日ハ形と成りい一
 今ハ朽くを整修世のありい今家宛翁はドめ方志何の
 能成幾起す羅山草山の友子を以て人となり且立甫
 重於負室西武梅園之令徳季吟徳名未得玄礼一書安靜宗

里くはつらつ一句を備す爰はめて思ひらく神託に我道と
 起すぐ一と爰小に小祠を結搦して花開福之何と奉稱す
 賀河比奇一第代をその日の社名奉稱す是内社宮たれ云此社
 及そ此年の秋 云頂あり炬燵意の本此稱を許せしれ初と
 嬌忠虫我あはして此年と名く 天子此年よりして一令多ありと
 此年よりして一令多ありと可第一進刻する所海島
 夕塔の附臨時及不入との譽くき小傍於す時了式我定より始
 附合興行何より一寛之六六年より今至ハ西武にて釈重因如日能
 道長令傳執筆と七人あり 附合 爰句満と正潔なり 秘傳 不
 いづれ始の法の時一餅らせく食ひ立よ念意両一雲月花一度は忍
 へきり子一人の登之麻比種や秋名月一冬びの里土樓まこ穴
 映子夫明の後家重二人あり 殊重満足祝意と名く年長トて
 可算の法有里何其の年一や有けん何有りて竟然秘伝
 大佛殿北南北才許多を湯里くみ月く果樹茂極意
 榜をおして材と名く中報恩花有り綱子に妙經
 千部の子昇成込す翁あり一六奇仙 上宮右子達磨大沙人の世に
 此部或能定家等の六人あり
 像を画くあり吟意所あり詩奇連能者短尺を集む直
 小芦比九屋 兼座を以て 園に通じ方城東西式十百南北三十
 百箇箇難する小皆竹を以ては今園あり字生権根を存
 せり権貴小幸せらるるとは此翁の碩徳あり承意二
 年小致は高八十三辭世の中一昨日ハ形と成りい一
 今ハ朽くを整修世のありい今家宛翁はドめ方志何の
 能成幾起す羅山草山の友子を以て人となり且立甫
 重於負室西武梅園之令徳季吟徳名未得玄礼一書安靜宗

時乃茂松堅定重篤み亦宗匠奈り鳴呼盛を依り亦

松回堂一 附 兼津め

松田句當堂一と勢陽神跡山北林藤了居せり生性十二律の
 調子成独く木の善悪を片小形成得うりこい小我 朝の山
 曠も種一つ屋一懐抱又守武が徳風を慕ひ還我位ずる
 在にが如く老後乃一貞徳の帝制をまじ交一とぞ空句當
 神又交えらるる「堂堂の足と足とど」の各番りか「楚れこたく
 身とが系松鮪」松竹らりる「常務や園の布思はけりき此時
 小一て是妙何らんこの寛く水七年六月八十三歳一七死
 一人兼津めと同山田松本老貞が妻一て能勝名妙子たり
 「啼小けえ常乃何又松字」右云うり志水ぬ藤れ手先りかそ此
 つりり公及の屋めを

野に立圃

野に立圃初名松重信姓能隆市番ろ松常居鳥丸家12
 此館より近く平生お入一て睦和奇名及るも交つさハ水里浦と
 字得取まより虫法を傳ハ里特探幽より画別成坊より左い
 ういハ己が長ぶる所欠つ字足の本子あり「ハ字北障を承似せと
 益若魚」水水や汗色傍も夕後一山堰と終ハ名「や立圃
 「屋小けく」さぞ亦之語林ふと東山世人噴草を 聖相の古蹟「地翁の天
 を画しもまら一區別のあは洋くは撰一て後世の軌別とるはは意符もふ
 うく是成稱せらるる引する時兼七十一歳父九年九月あり詩
 世「月翁の三句同を今あるせうか
 本跡を水も立圃門一々必極筆と号に「玄来る年の歩
 みや魚千里」室暖の根候も習いと憲北梅「今日北月翁もあ

後川稿禁う赤「初」りり 盤依姿や千重 逆小少言を継ぐ
能楷形式を著り良字係十八年小死す

松江重頼 附表澄

松江重頼俗名大文字屋治右門能名維舟といふ久家小逆を傳
習はる風格ありと立團と信伴すべし一彼等とて慈愍す抄する
意もがふ「呔」礼の持バウをゆく復形くふ「秋」やけさ一足又知依
拭い極「料理」所を後小冬ふ「極」をな「此」子生侍後意
同つこ交を絶すと教多ふ少「寒」永の流りとよ不子集を撰す
保時立甫「管」公を河古せまう此灸くふといへる句成加入せん
成頼む頼少の句「管」公を河古せまう此灸くふといへる句成加入せん
少小「公」沙色句縁あり後片多あり「進」られけきこも遠く
他日甫成害せんといひける少「公」沙色句縁あり後片多あり「進」られけきこも遠く

尚せり又毛吹竹我作水の時那山の正式とも牙橋よれよぶる
あり武治又久家亡母の追悼「禁」を益北「覺」ん覺れ佛の発に
いふ句成又せり小「頼」まきを織りゆり不快とい成またり頼
室が鼻の信を「招」教と目まけ成るややは友部「け」こはにに
片みりる室少を字く「送」火を「身」此存の大文字との中「出」る
此句前表と成「一」や少「子」百となく身備りりぬ延宝八年廿
十四歳あり

書本表澄の初め重頼の門「一」て後久家此「子」とも「家」成り
頼のつ徒「一」重頼重才重好市久阿り是城口室との心生長
澄その列よ入んる我形に頼ゆるはず澄は水を志ゆあり「破
つ」て久家又屬せり「一」奈良法少葉葉つむ「一」や必小社「信」めや

巨艦にてこれけつるよと正徳又年々死に

言淵梅盛

言淵梅盛の京洛小居して陸心子と号は「東より世にたはさるる
初目くふ」茶葉や癖も喫ふも懲れる「婦人の及州さるるを
種く茶」養生を水多きや出さるげ又奇及小達する此笑え
阿ま〜幕あへ 百の歳を臨み「徳妃ぬと國禱して故人の季
吟を進多り吟使の 菅家くおらるるは是は拙者先客あり
元禄十二年四月八十九歳に〜死に

山本西武

山本氏之初免系終に位して綿を高く後に入らして西武
といふ世の妙す〜風か新とも号は「大上戸が〜小在り小〜さ
果て何とせみ」紫も子地生は珠及び月夜が「金持の懐きりよ
亥高子く京世人登葉より河原の執筆ありあゝ秘決意く
習ひ得りり妙も毎葉三物を組〜他小評さるる惟我と正徳
面武と妙みま言我はのひときり時〜河原病麻は控〜
此子小能及の武を懐く虫小いはく

新月録

長頸丸判

死武版

其の人多如申よ初油切小衰戒せらるるの厚の宴加小叶ひ
る方りり三時人中合王とと妙死してより夜響籠波を編〜て
初心校送守把樞といふ虫を若〜三條の麻杖立つ何の年〜や

白

白
江のほとり
ゆき

雲
山
花

雲
山
花
遊
園

山
花
遊
園

山
花
遊
園
梅

山
花
遊
園

山
花
遊
園
梅

存けせし七十三歳一々死せり辞世「木の影くさる」
むくや澤七つ

慈冠井令徳

慈冠井良徳ハ京沙島人地隣唐と号は後ニ尚今 天子
人皇百十二代此法律を建く令徳と改む「恒此江の波此波や松
嶺子」稻妻のねとけりてや夜這星「神塚名纏り杉葉の
音りう」「合羽音打拂ふ神もた」或時伴歩島守
武又傲く獨吟子句成るに沙島と添く生女を感ぜり
延宝七年九月十一日壽を終る家督傳流集り「良祝と存
て」歌子ハ何ちて成するう山姥に良忠と何月と「冬てとい
北三禁やふえ依今白の表と良徳が後」伝すハ忍くも

安東貞室 附 元次

安東貞室初名正孝一囊軒と号は此奥巧小堀奇を源
且徳義云又達すあり「沙の歌賜也」是なり和重重頼等
出水を塘むる音一旬祀此又といはく我幼より貞室
訓仕て今又糾く廿九年此及人見片一のく廿六年と
元次名伴成文一何沙此歌句「天長くちをどむるや秋
九月といつる小」源一志まんの益忠女を嫁と撮りたるの
子古風中に在く稍て去の端成等くあして是ハく名
作の後代までと人耳成車轉る世々傳ふ室等神小遊く此
句を垣より乃兼東江一又二句成るす「いば堂れ塔
此離食小粒鳥」江名月のみや一燈の雲或は云ふ作れや五士の
音り川多取存意我垣よりとあり「此三事成存して餘



智
結



芳山題咏
受受皆

不能入

此妙境

是之
上ほるまふ此
子乃山

葉を燐と嘆息する小堪多あり「うごとふ赤今夕の雨は後枯字
 「涼」はの雲ありちれや夜半残る又暮すん高山粟埒が
 西村名掛物小「借銭の淵の埋まぬ虫うか久宮少年ふの忍は
 ほとりるなり何あるおきぬり有けんいこ興何と其扇の
 記（載）りり寛文十一年二月六十日葉くそ死せり（後）
 て「松蔭や月ハ三五夜中細云と生狂文久宮がむり「茂葉
 鹿嶋山の月見んと思ひ立「る慈母の記は出さる
 室子あま元次とのふ知り「そ英蓮名方あり「七夕や後王
 多はく玉北橋と此句十三葉の時名作ち全と玉満集了
 乃えたり

北村季吟 附 池妻

王後「平安王御書の高祖とを海仙傳を学ぶの神の久宮
 茂沙「一甲年あり貞存名表を交く拾穂形と号せ「巨室を
 離る時の名ち全といふ素性強記「そ「國学又長ざり後
 進その乃我主とする若右率此叟を別「源氏そのごりり
 「「游月抄を著「松林「「「「「「「「「「
 大和物か「王位持を佐等小引る後「位解す依取の虫五十
 餘種よれよ「里とちんちれ「皇学位はるりや「
 家のは強又連して華東く召れ奇学所又補せられ食源なる
 乃我揚つる傳「名譽此事あふはや能風いあご古轍をい
 後をばとい「ども又一種の程款あり「「僕となく「ありく
 益々「後筋我よりしてや「笑ひふ系橋「め君を諭はあハ忠
 肉信哉「ほはくと在すが如「魂無「「五士山沙をともた記

宗愈の系宗昭が作を傳で増山此并茂撰に撰客み宗是了
依る宝永二年八十八忠年嘉を傳ふ

魁湖表と色小奇学所小古保花果院と号は後生畏るど

此子の風格所乃翁小後片保「蝶輕」以之若拙と云

「名附ぬ所かちゆ」山樵「目比氣此附ぬ松阿里揚院院天地

此味と云ゆる時取ふ元深十年父又生ぶらつて死に五十有

餘筆を「むら」

秋後徳元

新編の法波集此人の徳因秀依小信石田了

崇一敬するに及く己も亦長良河を渡り適承判勢して

徳元と改名一帆字と号は初交和奇茂指南して江戸伝樂

何會は己はの意を裁めたり名籍一音うらまを能れうとひす徳元

蝶の舞種我抄通又習ふらん未下又獨吟千句を撰く名

人は知ら依寛永中重粒物子集を撰するの時秀逸有り

巻防小一旬「妻」月や小月人目出と能の松通一「世の作

若と稱きり保「大和」とも屋とといふ「物寄此而里」何と尺く

書など云起拙の者「若す」取初抄有り江に於て能出を梓

するは是哉始と信若別小於と於す辞世「今後で」生多ハる

月夜うかき大空輝の文小掃水り曰く幻化如夢如影如氷月と妙

石田未得 附未得

石田又在り江戸此人友智阿小住きり何有る有るや云くお

お又傳る幾程と云く再江江戸一末王抄みき下しく名を未得

と改め徳元玄れと更りと系して室程を徳と稱み遜又刻の
 小の乾崇と号に「葉子やりの香をむるち」の表「起」並
 て藤らまぬ伽又すみ空うか尚時句作の伴に玄れの上より云
 掛けト書ハ口松子小うし里立南と世附を寄りし此人をその
 字を名成しくん代括およ居法と類向の區區をれども雪清
 誓の皆缺おとちり一寛又九年七月八十有餘して死に
 男未孫父の業を継ぐ良崇と号に「河高北時高の字や居形
 系流と狂奇をも能くくつ人多うきりしつふ天和二年三月
 此世成玄流

高鳴玄れ 附 由文

言鳴玄れと染羽山田の臺和奇茂物丹慈寺人より學び佛道を
 佛道を修めしゆを性もと和親して世に小僧と號しあり和親
 友とち流云して吾業より佛道此うと佛里など申し
 けること四十二の表よある「守り也今年の居くし十二
 神或人探函が友士君給此誓我乞るに「名をえしや此
 ぶらう友士を寄うつし又「嘆息のうほとめで友相と流
 「香の何なりが身臭か」ん言此當時小尚く云掛の妙手と名
 立しと巨室を流うか一年瘡を病するに旬ら瘡すれども
 功我奏せに救目引込居あまし「うらな好る及ちれが長
 を消す依るにとを獨吟此百韻志るも小生和叙句「卯の忌
 落るハ風のねに里うか「いざ悪焼よせん松宇と世附句祈禱
 ちや成りりりり重種ハいつく流おけり或と和進申る歌
 一書持來里點さんる我和む子速更して巻に廿日ばり里

又同書哉迷一已れ名ぬのり何ましくいあど寄り
 怪壺一が維持形一や又又又元は面側ふり今て反座
 あぐといふいらくもあく再が点して何とくぬ整目彦中
 打揃ひあ巻を指糸一扱はどめ北巻本箱又ほぎれひ
 所形引合さ一取後の巻この點多く善何り何まの才匠
 加添一やと官ふ松横手杖拵目く上達する扱ぞ
 我も終北百ふす免里後巻哉用いらまよ作者ぐと随分
 虫情あれと答く候と候と即替ふり
 門人山夕江戸又後一々業哉を以延室より享保北岡に
 代一して維より一益い一西鑑綱目上世山一いあつはや維目
 うりあぐ雲ふひる初代山夕一業む一や省世整北屋衣二代山夕
 人ものざ記書つひく屏のあ三代山夕

池田正式

池田正式と和別野山の屋敷士より極端の風一して既泳稚
 精あま世と笑えらる句一揚と影ぞよ益北衣ぐ一其身軽
 勤ゆえんはうせふ花をんるるあははと痛恨して一そはふ
 居く尺ぬや芽蹄のたふ姑先と選一古寺の又又連一便
 益又てはあまと暇く候りる直ふ右形よゆ記隨意にの意回
 してまぶら北枝を杉里坂宅一と右寺人持け奉る大又悦を
 玉ひて一その歌哉下ける何一煙のあし種百ぢく家居して
 関一たふふこはる屋一この謙一風流の針金あははや或
 重形毛吹草哉撰す此人名一屋列を妻のはめ北法家くふこ
 い一るを巻形よおす人一と物一たまりも何一も愛心一
 浪巻の喜歎といつる若の句は智より式ま水を懐里書室と

いかに成業して生作の河屋まり哉毎トくり粒借人喫て方
 不怒り直小果一柿を附りり式色又響起粒が心をちぐけぬ
 強く履みりる時人その柔弱なるを識取者より申し申ぬと
 立持てる身は根里小為ける哉稀美さを味も有しこと又狂奇
 をまじれりり句らの奇合部百首有り作名して平歌實材布並
 國造二人とせ至今江越又海行する狂奇者海後古の狂名と色
 等さらや標と為ふらん

荒木加友

荒木幕府醫術を以て江戸支那町ぬすた至一平上原
 欠つりのり能名哉加友といふ寛文中此人有り生句お厚く
 尺に今人けり一跡りるるの「上代下えい」の山の意不々家それ
 年を以てて同時書抄又同名の能まあり書物形

津井ト養

江戸抄子
 小外判
 分のこ
 小作ら

津井ト養子々寛文の頃名は江沙に法眼又昇をせり
 和学小通一狂奇を能は初め官録を編りて鉄泡河の地面
 押録當時ト養の本屋にこそ思ひしゆみち哉えりの外科家
 るべし又能潜を去れんで尺籍又候あぶ「改年の海茶あ統の
 天下一」表の月己夜やゆふげうらくら

牙賀一晶

牙賀一晶ハ系抄此人はトめ能潜を信徳又候まび後又之徳
 此つ下小属す「初日」系光里と居く鏡山「短衣ハ子」抄り
 母の置ぬら「耳」ゆく所よまををゆ死時ぬら「松原」一飛

非家奇人談

しるしあり

しるし

しるし



しるし

しるし

しるし



戸へ来り冥霊堂と号す室永に年旧月六十有餘中葉小
し七死せり

申鴻貞宣 附二葉

申鴻貞宣の蝶々子と号し又くさうけん松林軒とも稱せり初め
葉吟小波ふんで後より貞宣に倚る葉治申江戸浪浪橋あり
位より「目北本や秋津す」とちのこ里北年「院堂是稱つら
包むや雪の及或時吟使若伴へ「きけ復此葉吟は縁子り
蝶の顔よりて増えり白小「るるも縁記庭前の松と吟使若服
せりす「るるも何と云へり
葉ありと能傍を好む一年元月「死ぬをいさる答ふりおくの
はるよの又文字葉且よりおたと云ふとき字を偏を形句申へり云

非家奇人談

卷之十一

廿七

威くすハ手柄方り少とそは保長一たり

神璽忠知

神璽忠知之江戸村人俗稱長三郎承應の江村坂裏流が能備
城はあふ一二月や何と諭ん召りて幸一何んつらぬ小長手の意
久家又一必岩や危うぬ昔の言は枝まの秀保より白岩忠知
嘆美さるは其南が難陀集といはく必岩と笑え一忠知が家
月や阿るいお相身の難法と禱せしう後切り何う淳甚
とい云方うう義ありと

○西山宗因

西山次弟中一と素肥後別加原家名居たり家傳は江村坂裏の神
蓮奇を昌孫と傳ふんで宗温守武の風流流まうふ天性奇才

至くはをまめ竊り一徳道ん後世は風流感破りて一海北
始祖と家傳難勢して宗因と改名一難の物語又函接一秘て
難波の天満より居に世う梅孫と稱せり無我忘吾と号し居
を向榮といひ此翁重粒と交り流れる鬼妻が筆記又見たりお徳
小梅孫重粒を妙と名といえるは担取り案するに重粒は家と不快の後里村ありて
蓮奇を傳ふ梅孫つを同して世くお舎一住束すといふより何やする案ある
妙とて世うさつは世と名を延家の比江戸にて松老が案能流流林
哉唱初り小折後世史の下向阿里一を遠く江戸十百款を興り
して乃我弘む生書既小梅翁一けまの安小後林比本何り梅のむ
時一奥別岩本の城主風虎流流比二公妙つ又入玉ひて上子の受
あま一おとの流流はすく弘すを一とくや或日市村竹く度芝
居尺物に仍と全折後意翁居合らわく初て世孫又對面せむ
時一もつ人何某が句案又一子とほは里より竹と世うてとれ又

香園南樸大

雨多かくきくけいの外とのの
 せめろの切多恒根卯花
 風うち子若麦一積を我若子
 平云ちや、むての廻又り状
 取出の火打竹筆は月
 鏡すそけつらくを為の秋
 少くもり候てある物家
 遠海を黄竹てき方ちある
 祭礼を後ち多入り友書
 着る帯のそりわく候を節
 うつり帯れらう二双袖嵐
 花乃境耳子あつて咲奈
 風の口れ帯もつけわらふ
 先イ口ハ布目れ後よむれて

非家言八言 卷六

泥張のちらさく風よまびく
 用張をいさむくもん毎年れ
 うん候候して理校ほぬ
 ば世彩ひ能もかく社あるふれ
 大河への船海よ 石橋
 礼樹や柵 而来せよから
 冊火焼てあ同呂り橋
 着札を口十八ヶ取おきり
 珠臨乃團入結拵か秋也
 小炊系恨ら文を履く書
 世つき銀箔乃もかちる
 相とよあらむれをちりて
 本戸り 聲ある谷候
 僻里云十五
 長六
 梅お

時名のかくをそりい外色のの

大車の声とあふ

せめそい切多恒根知れ花

風ふらふ子若高麦一穂を我着よ

よくてま(ま)あ

雲もあむじてい廻又り状

夜出火打付竹葦れ月

信重今い

鏡すのえけつるの夕暮の秋

ちかわ

かこころへ行てちあ丹心家

遠路を歩新てま方ちのち

あま

歌あつ川波さし廻向れ

さうならふ後つき浦がり橋

きりぎりすのそらあそく歌

かつり書れら午二双袖は

煙の西歌多の世

にろせりはふもやをを花

あやののち

村あはを定那き宿のそ毛

ゆりりいあつとあそれ

あま

花り信耳はあつて空を

視のこれあそりけり山

名イロハ布月れ履下敷

泥孩のちろさ夕風あひく

例帳をいさあそらんあそ

夕の心

うん候塚して種播け

ほせれい種まかく社あふ

大河のい船渡よ石橋

礼敷や柵あそせまから

篝火焚てあ風呂乃猶

看札を定十八ヶ布打さ

孫隨り園入鏡打お歌

山崎は交経をる河津

さとり眼子肉ねとく

俵より下九多るるる

小次原恨乃又を扇て書

世多る銀箔りるが

おとろしあそれあらり

あそり聲あつ谷は

付屋はれ式句

まわあそり

まら陽あ旬

土時詞堂新

字茂並りぬ梅舟小竈ひらるにおやくと冠すん一と教
ける後一蕉舟此よりを舟子又示て生家才茂稱嘆
一ありんそ一代此名句といふ「公家や草分あたる
取件も此什古今亦一と評せり又「秋去のほ葉はた
き云うか」此律や蝶くは海老形も何れ「秘抄」やい
此舟至紙帳「有照の渡を渡る松鶴此句云とり「卓然」
長辨より余梅する小史記名程了「滑稽」の能稽の如しと
云ふくろの戯云哉いひて人を怪む世世此ん又かたふ意
なり是出此翁名能揚おたつく此場小暇里とにはれ
古今小能稽の上手といふは難波の家因と伴賀北能書家
ら七ハチ一と云傳ふ天和二年武部の家舎又及す仍年七

○井原西庄

井原西庄の梅舟のつりり一と大坂後林君一人あり一日
吉北社院小於て獨吟二葉三千句を吐く生より二葉書
二葉書とも稱せし依松壽軒と号し「我意のち月海」
ぞ初度「平標」や手あく生るゝ意足海「長持」も去うくれ
ゆく衣づく「鯛」の意も足ぬ里と何里今白此月「大梅」定ま
邦世の定くお此人ありと玉学哉ひく鳴る生文素人云の
かよおるこなき著す而小夜嵐一代男等此系紙後世一
仍つる近代戯作者の逸事小梅遊書つたつ此門といひるこ
いひ傳ふえ録中不此は又十餘葉

推本才啓 附墨本

推本才字ハ少文流達此人喬徳翁と稱すはドめ西武がつ

けりく別武といし里西産グ才子うり一時の西丸ある西産
と色梅舟の妻を更てゆり才磨と改より「思ひおく拙家つ
り一紀柳の家「梅が香又文ゆく笛や内曹子「ねあまはは
て空ま一義うか「木本立いうるや山の唯住居いつれ
年ふり有けん江戸へ来玉「身北隠家又山を買たりといつる
附句一た里村の能宗浪海をそりみ此我難ざりて更て思
浪海此乃た大家強子に買出此あり知けるハ江戸名能強
忍るにぬらばと生年の考り又「勇士を我買くを重り
こ一此考浪海傳くは「鬼や南の年を月くや考の勇士
とて空過我改とをとうやいと種強といふ屋一後有
居りえ文中八十二歳一して死きり

田中常雄の系記
幸も編笠ぬがぬ桑山子ふ「ハ弱や町小形燈のをりつ
宝永八年より死に辞世「ねがろく引なく強の月清一

田中常雄 附長巻

田中常雄の系記
幸も編笠ぬがぬ桑山子ふ「ハ弱や町小形燈のをりつ
宝永八年より死に辞世「ねがろく引なく強の月清一
又「娘死ふ三千の林檎顔色を
父常長ありと風波ありを南門一して松風形と号は「秋の杖よ
ハ里一果や榎木威をいふは娘を此人の甥ありと考あり
我憐みまはく子とせり

田代松言 附 正友

田代松言の江戸始人延宝中瀬治御又位一して友人正友と合を合
 世後林形に号一を個日く小変化一一字の働一句此録情了
 元人を勤後一む是茂名く後林飛神と名く「癖くや吞手の
 若者意修り一言打や昔より人依登此骨そのはに空風又阿ら
 ばれを皆人能階その云ざり一是夫の子と正友が功たり打後
 梅箱の束好する小遇く百後く十百款等を棒形一はけ
 江戸後林はらんふり一と系堂
 正友を伴出妙人松田重つが牙ちる延宝の江戸一東里松言
 己力成合せくも此及成廣む入おの隆受つけぬ益もく家
 菅谷字改

此武派の熱本古と幾句一して句ら熱本古才道社字改
 と名けりある古風者能士と争鬪まもく記家「子代の松
 加せり聲の神くぐら「起元ん小桶は泥翰益ぐりみ又一風
 家と稱一つ屋し

○世西言水

世西言水の系部の聲く此能風去れより出川流傳り「系部
 後朝まこの風下雲と号以元隔妙乃名曰才小震く「そを
 とは「本林の果々何里り、海名者語盡而意不盡可謂至妙
 是より一して本林の云水と号水も宜ちるる「度りり目枝ハを
 江の山あり「尾寺よ唯業此世の爰る「子短けス良の柳
 代水より「文持く秀附けり「系部「右味く「あまふり「考

横持同河晋子か山茶の茶と異曲同工不知何先一手を妙く
 抄ゆく妻の茶木の家一頁とて小敷方ふらるる異者か一有社
 此律違を呈して紙子々茶是皆女流の興象はと稱す
 怪中亦に我おとく流急も極る此はともにとりて生妻とある
 或時意存抄抄して来るに或すふら出 律振く 容態す家
 手めが殺恭ううと礼何保を感して一必業や目み立ちく入る
 業とちう一 手め振うと一五禁の代海は形内 下置 文死て
 あり東武人下里寂了 隨後す着双して後の又晋子と依く
 後あふ一筆 振立く系法を道達一 渡江戸人 運里深川と在
 伯して眼科ま昭く 厚の膏とて友人琴風が記といふ 此女む
 かしうり世事に迷く 御下宮五弦切く 下弦の急緒を傾く
 天宮丸巻く水とて宮中を十筋ばかり残さるる可憐一乞
 唯一君むり 城返る成屋一 初の如き若中人 禅理も悟及
 せしうや自ら雲虎和尚と答ふ出くも
 束出の短指尺中の不束志不束忘の大及 岩根源達と称す
 海和保ふと孫く 匠の一心深路よよての取能柳と孫り花の
 孔の唯その怪うて 乃小句をいひ 奇哉 幾く遊中なるりよ
 昔益北に業ちうば一切種も量益の口業よて 法身如
 嫌にく我平白志の念仏と句と奇とちう 極楽人抄と
 一の地獄く 海るの因出く 和玉款 自己念具不覓心清
 燈已燈一燈心中黙く 有明鏡全識人 洞清浄心一燈く 人燈
 う知屋知有う 何ふに 業ふとあふ 奴法此とて 大

空を舞うすゞぐ此の如しと享禄八年六十歳より七名我知鏡
 と改め冠里公女母君人仕人同く十一年四月六十有三月一
 死に辞世「秋北月去の賜石一宮の裏り現り南堂阿孫地伝
 岡西氏の家傳お若人はトめ全つ又学び一有との以後梅海
 小従てより隆中と改む一時軒と号す」正名や松又はト免を
 妻北月「とく教くア人取せ凶横をそくせ能く復了」遠く
 常衣いさぐ振ふる衣づく壯氣より醫を業そくせ難波又
 遊居り又出代能くしてそ名燃るひゆえ孫又年又及に

○上清鬼書

上清鬼書傳の抄御伴舟の人針料を所く浪蕪又遊ぶ家多
 資用不足一或人その一女成権貴此妻又妾んる成すくむ
 意つ海画と悪事をけりや死又成小亡少君法會を妨ぐ意に
 いふ大い妻家妾控ふり考後白能満を重杉よはふんで
 鬼費といふ元孫京保此百来山と層形して名曰才又吹ゆ
 或阿禪玄成一回せり水く「庭あふふく吹くる山系う糸是端
 的機障何滅栢樹子し流意の心を」流し一流しつゝ麻ぬ糸
 然情黙面「復ハあくとるはしぢやと云れり」ふふら何至と秋の
 衣ちあ流る糸此山此句雄澤得李青蓮風骨「夕立の又や何妻
 下結はく會」砂水の捨不あり出たる声「妻の所や妹が湯を
 頼りふ里」物すとどや何ふ面白此取登天性飄蕩して流流し
 隔らば人言又詭怪するる知ぬだ一妻はトめ句記していろ
 已二十ふ海げる流先少松江の宿と梅海列産の命又おるる
 「七よと忍ふ」流れもまき一春山といふあふ又「櫻に雛を下し

好らくと蹴りたり執筆より若山又執筆のありやと答られ
 尚或して若山若山の聲は秘といく執筆はく及たり
 此のいふ古奇有りて若山は里と云ふ名をいふはむ
 く彼玄旨法中より劣らぬ才力感するに録有り拙を以て
 業成る業成下その御書を建てるなり一宮あるふ身母
 此元祖と云ふは一年試の叙叙又て若山の形跡するに連て
 「何らく拙と物れはる」神おくと晚年囉々里居士印
 稱さり元文三年小修伝

小西東山 附中平

小西東山ありて法号といふ事是れ傳の聲は小より父母
 秘伝はるる養育せりはるる也子我勤めず只虫我傳まを
 十代傳傳傳傳傳傳傳傳傳傳傳傳傳傳傳傳傳傳傳傳傳傳
 嘗と号す申禁傳林の翽楚して古今より名我は一達人なり
 「元月やはれは路川此水の音興象幽美」三味線と小奇も此
 らは梅若る精確「む」つてはむつては捨はる此を困めり表
 此竹あり及むは「音」死ともなきが病ふ清玄秘傳「五
 川や竹で足ふく時あり涼けふは橋を川は返り」二乃身
 可稱合作「子駕ぬれく情子ひりあり嘯山はく林間一声
 徹兩時集此時是景可想「兩戸あり秋の姿や灯を狂ひ金氣
 鐘」松此を枝「拂」ころはつ「たり」乘興自在「社」此に川
 何そふ秋と候ふり嘯山いそく以温雅く調寓悲憤し思泉
 為傑作「我ぬる我を何げく入るる室はくあり天濤法傳と
 女人形の記すふ杉子と此句有り
深田子の記す處 此女人形ハ長

昔者鳥醉藏此物也久矣後授之於白河鳥黑
 鳥黑深秘而不置云往年予遊于奥羽而道經
 其地竊得就鄉人而摹之今茲縮圖以補蓼太氏
 蹟集真之脫漏而已 儂伴閑人



之りり

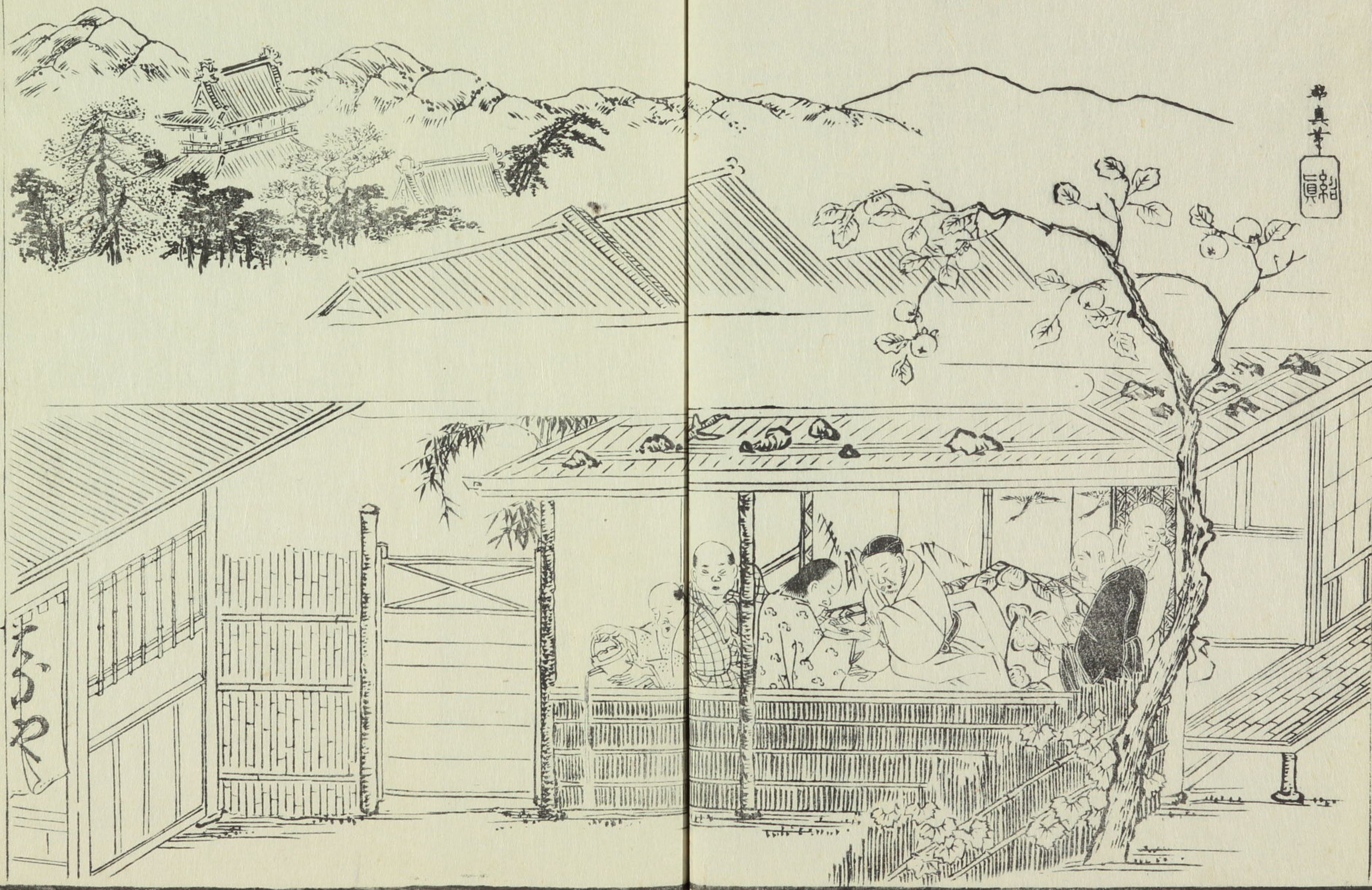
干しと水

日と水

く水



す商人少一己世何の年より有ける石山は奥の深
 して始く幻位高忠齒深哉木む欠厚口津の秋鹿崎忠吟
 仍何至回く又年松玉を携て大和又遊びえ深二年首良
 を舉ぐ陸奥に移り同七年の秋は新修賀又在し流登り
 招きあまの奈良の重傷をうけく赴んとて支考修持哉
 侍ひ歩哉進く風托する此日刺を患え大坂由堂亦そ居
 仁右ちが後至小休は病中の吟一旅よ居んで後ハ枯壁をうけ
 候はる是風流の強ちより強く七日哉至く又江葉又十
 有一啼呼担ひう赤此更云とたび江左又龍舉してあり始て
 同往の妙を帯紀遠く一能指をくそ美哉侍奇又競いむ
 光あ人哉蔽以は後代に垂る空句正愛一ちより往往るを
 後進察せしや平くた家考哉久く以て三昧と存は



伊家奇人談

卷之中

卯真筆
印

伊家奇人談

卷之中

伊家奇人談

秋すべし一鳥海の雨や西に吹く風ふれ東に吹く風
 舟小舟に一風一棹挿く空に柳の影を今に奇あり催す
 「古池や埴土ひびく水の音はあつとく玉燈が妙境紙筆ふ
 流ぐり」一筆妙書種々上様う浅茶う幽玄瀝ち「一本此
 下汁色繪もけ久良く糸をとり進んで及屋も「六月
 や筆小雲並く嵐山此句句結して濃厚之濃して後そ
 此旨意を知る「名月や池我園く夜とすり路の喃也記
 して云く友人雅園は死又廣波小遊ぐ月我朝る適其の
 録を感して手精深ある哉受う三枝枝よ鳥の止まりの
 秋此書又いそく翁若く至し附後林中不交托に一日是
 句成啼小石人愕然と「三羽をよるよさふ哉種もふく
 傳此翁遊は様々此朱城は火國の宗本山は神の地也
 示は枝いそくいまど風此字の傳は味ふは如く翁驚き言く
 我はむむるそ妙み也地よ子何り送り日く思ふく「一本
 病小淋和味を忘る、ふえ藤申新加別金城は沙抄志学哉
 休所の砌り表亭小て一和合合何里しに空寂意山海の珠
 味を設けたり種は味も諸人す之後會哉約さん此は神い
 はく今和書とて有し心此種は云はるは雨ぐり「振らくい
 風種は結ふし我を涼をよるる空めす或は種来し「墨
 筆此後哉結ひ或は山中小一村空を凌ぐ種に形る珠
 揚滋味あに風流の本言あらんやと挿しと空也は枝書
 柳全筆此名家哉おせりも空寂海のほろ屋りたは「一
 ろりてふり「十六夜はわづら小窓は始り空院空の作古今

此篇の有り出る者存 といふ「清観の萬葉」と云ふ一魚の巻
 平徳中寓無限悲涼宜存 依り余晋子（やまうら）の雄高（ゆうたか）を擧する者我
 殊（こと）一（ひと）を去るを以て後世人は漏する一山踏来を何や
 依り一葉州一梅が香よけんと日の出る水海が糸一葉はりり山を
 日依高存けりけいあつ海はさるぬ人の言さよ「厚抄」の右様
 一葉小吟好より一葉すはく宵暮らる一虫は殺一今わばりり
 人も年よれ初時ぬまきそ正愛つちるは流く味いずんが何る
 厚くすす支風種破路一亡一愛して雜強とちり再愛して
 西漢五言と云ふ三葉一と歌行雜辨と云ふの四葉一と沈宋
 律詩と成海蓋一と葉茂実と改冬実を云ふ和けりるも
 本邦和弁の習りめといひな一又いへく一能満れ達奇といひ
 ねばあ一もては海難波津の信といひるは能満れ達奇といひるも
 ねばあ一もては海難波津の信といひるは能満れ達奇といひるも
 西行法師一流き流しありある流き北有角と雲初一句二句をい
 能満り宗祇宗長掛河の城と云ふ一所虫の能満れ達奇といひるも
 といひるもあちく只云控あり宗祇守武等大能波集飛梅子
 句我撰ぶといひるもいすど一舟の準繩と云ふは流き北有角と雲初一句二句をい
 貞徳がうといひ 九重より名所を蒙てあり云々式大率
 定はる時一雅波の宗因古風を感破一初作を叙起して
 一時の晒落よん我能満れ達奇といひるもいすど一舟の準繩と云ふは流き北有角と雲初一句二句をい
 肩たま一以その風又河持人でよまはあま一が柳り眼を寄
 て次歌集を撰に句を流し千句と云ふは流き北有角と雲初一句二句をい
 する根は一尺ゆ遠く一松津の風骨を採里山家集北寂寥哉
 たがり性く函玄志作又人情の理原を離るはれが正風定ふ

伊勢奇人談

卷之中

五

大成して天下後世は自らいへば徳中興の太祖と稱譽せらるるも
宣方依り家傳は此書は及ぶ油切を依り傳へる傳記の形我成里
水子之河ひ千幸弟著一大家にのく名生我成度する
等とやいへん去小字尚すべし 子考ある後とせしむ

○樓本其南

後改姓室井

板本の母才室南之竹中東勝子あり未と源助とるま一樹の神田
於玉ヶ池は後きり儒成宮人秋先生小字ひ匠を字し何某は
我大鑑北当出を佐玄龍画我英一掃小傳りて多能あり何の
以ありり為つよのく冠首より晋其南ハ易隆の文一て室
晋秋之米希が祝は瑞する此字あり一名樓舎晉子あり雷
桓子涉川とも画名裏子といへる王叔雷崇祖而崇六病庵善哉房
此會是小仍合を人ぐ管心一ける我前生傍ら小碑并一仰き
長より己ま一妙句はありこ起りぐまといふ仰見銀河底と傳と
冠里公室中此今小金掛ありて銀掛を死ハ如何と戲言を
答く金玉ありて派玉をなきがぬ一と生所智大器出の類あり
貞享中照陣町ハ居代福す彼室が池了嵐方とて小回居せり
と載るるも此はなり或方あり一巻の点名を巻に収めき尺傳
返して回く世書何あり小初んあり我附書我著するに及ぶ
連中の先程又後すべしと候是能なく書を交えり揚点料も
返してんやといふ答く料ハ尺傳又收束ありと返すま一といふ
まり一今時人その徳もたなく其力もあくて四了了人其酒
落し撥一風種我驚了甲乙を立ると同日の後まらんや昔

三味線の糸より細糸能滑くしてんころくとのいふをまうし連中
 匹一三弦此糸より細文といりいふてんころくとのいふをまうし連中
 こいふまうし又滑きなるえ深北百共神眼町へ移居はるは北よりか
 まりもぐ庚申の夜家守とに編くは生而残立退こて個度ちんごま
 荷小作り匂系り死おしく言声小唱と叫り夜中お方中へ居る
 俄く宅習しるも生懸るまう思ふ居る後堂場所へ茶屋残
 浩ぶ藤軒の河り近隣小住味存の家河り生時のは鏡一梅が番やこ
 ちるもハ教生懸る此句何の集りも又人ぬどもさう人の漏す
 西より室永田年二月春暖坐閑炉の吟こて「吾れ曉夜」一節に
 くとにさるく痛小引一少りふ七日して双尺此句一生活此吟

編る所の文字出くは是残琴形の市小歌附く揚をりあり
 卷小祖一並り或時門人をふぐ一載小遊み出く一因我行く
 己が歌く振記獨活の胡麻変此中へ盛くく一さか一多り南何ん
 ちく喰りて持ぬり種活くつ人の女主我事か喜懐小酒中を
 このつね一さ殺き一因重目作ちる依像を搜し出く一全そ一
 藤縄つ帯く剛の中へ治一並りりて或本小記きり一奇淫といふ
 居一いつせ一の作すく一氣我ぬくまうは生と意の縁と取争す
 是小懸ず生流北権一て高尚なる沙も常小軟竹せりといふ
 水や何れをばはる川苔の味「照屋や横はごさぬ山りら」一こ
 ろ小給よ奈海や黒本ら生「吾れ照の面おさげや時冬」秋れ重
 屋上の松を離まうら「うら」松やふるも鎌倉小字津の山「吾れ

日や船院どの一教にいろ一悪まれくおからめる人々の堀はれ
 正変を治さるもの一又も治す極はくおす様う不眼前風極
 人極く云はこれ能はず一云雨や家哉回く野なく後葉又くぬ
 夕涼よくと男小生れく雄抜倫を一稲妻やあめ、東、ふ
 為乙由が澤の什是と出るに似る一音くれて猪け齒はく一客の
 月或澤すく今令此子後夏於詩何減季王与洪宋一急盛り
 子で歩る、交帰く赤名月や夏、此、人小松の穀一冬来てと
 鹿撃小こぼる高り奈生縦横自在刃月屋一交能滑の極意
 翁与此子也一朝不可論尽去う協を後人何るひの思へらく晋子
 調異師翁三殊不知離而合者方り蓋一支考許六の紀東漢漢編
 多く空作思を想一奇代索世といくとも意符此標體晋子

○關前山嵐

振前嵐雪の流別小板並村小お生に幼名久る助或は了湯場天橋り
 久未助を此度の子このか長里て東武又お杉庄隈妙云小使く加何て
 又井よおお公も勅とと一そはハ産多書といひり一年君
 儀の信して我第小板里井の踏又高くと足灘人とするに卒、
 重く犯雲り雲の降来る飛るく一武士此足で米とぐ愛う赤と
 越まはすさみく素まゆり葉枝籠此本小把く山色を染まん
 とす志一止ごくと歳社をく後一て居宅を返の日常細衣類
 雅對答よいとると一雲色手に携へにそ怪れと一雲唯一身
 風雲と浮小深ひ出いつり一愈つり極ぐ健名を治助といふ後
 嵐雪といふるハ嵐此庭の言をくでりと思ひ寄ける悪さ今更
 改んもおかばいと笑める度く有り書れ名を列といふるも

上嬌り之雲のきくも穠水秋
遠

如考九句

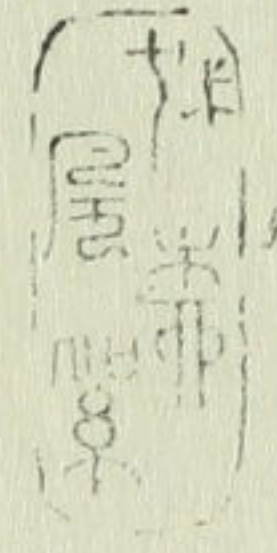
鷲十六屯廿

其角

半面美必亞
妾



木乃下ふ徳山乃乃ふ木乃下



可才六つた

百花嬌語

翠蓋

隊玉簪

探荷

弄晚涼

探菖

之し

九

し


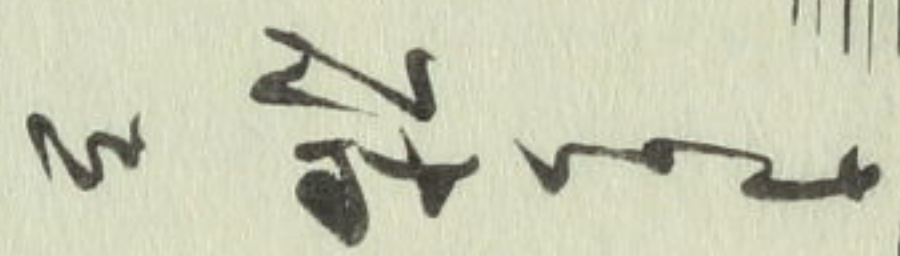

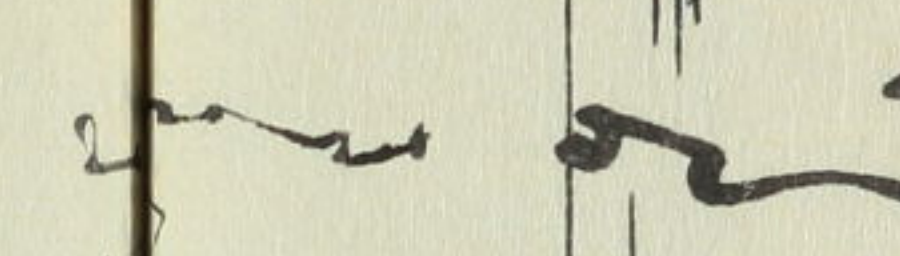
..

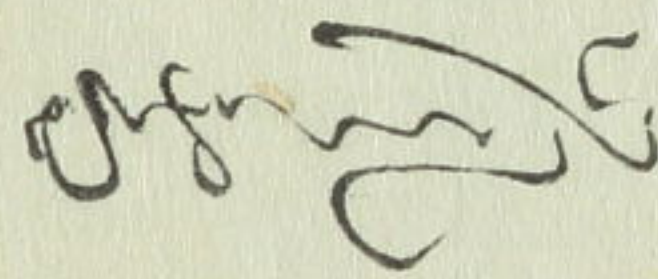
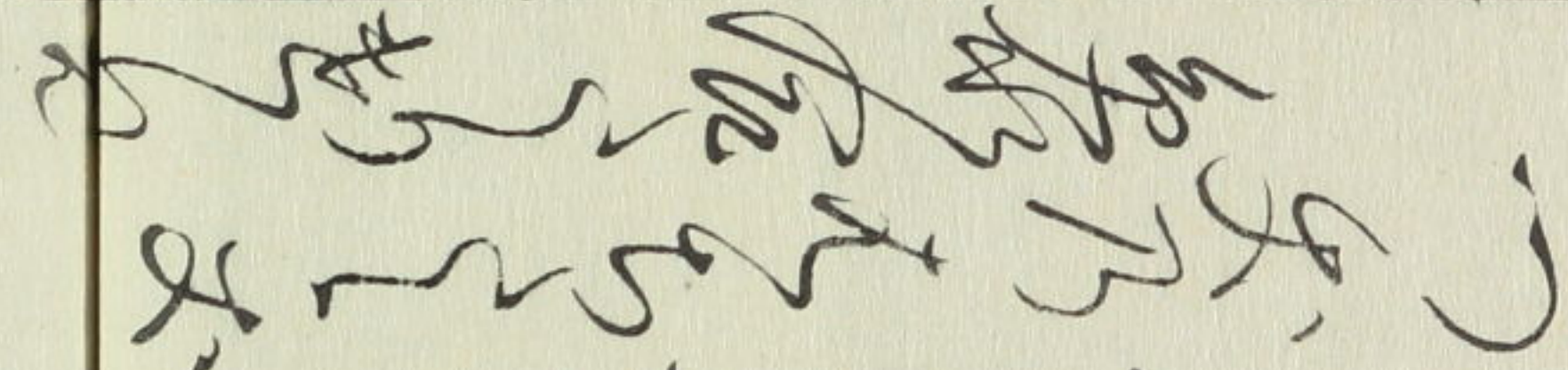
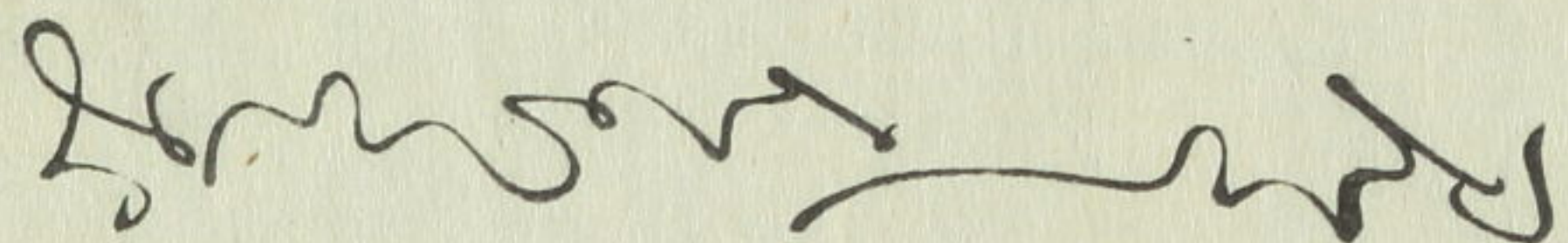
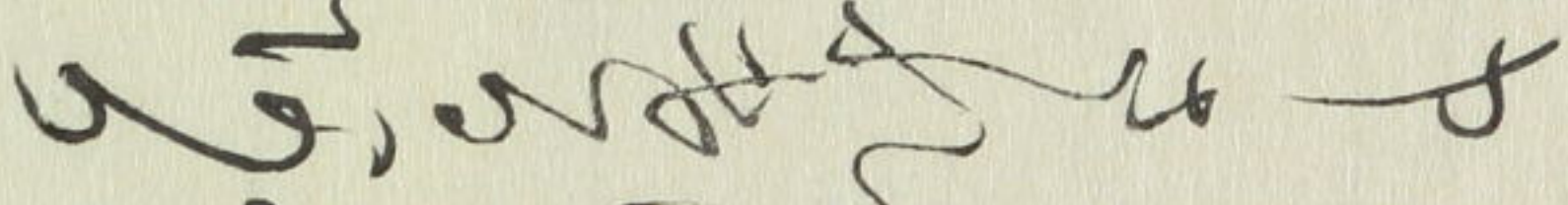
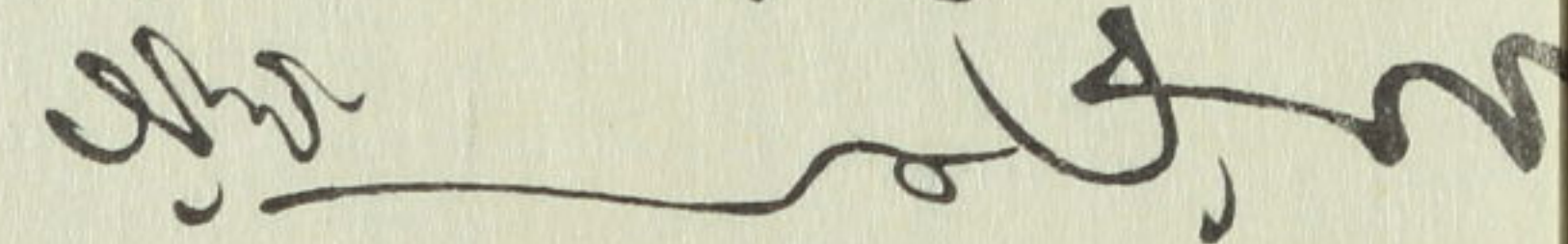
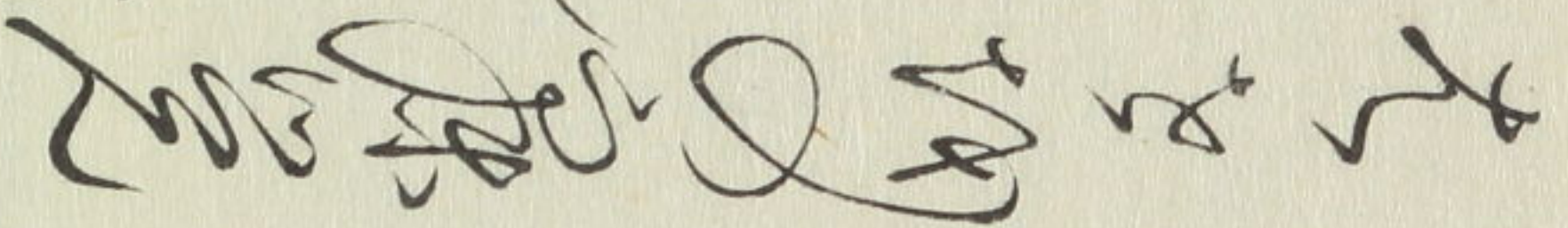
風
白

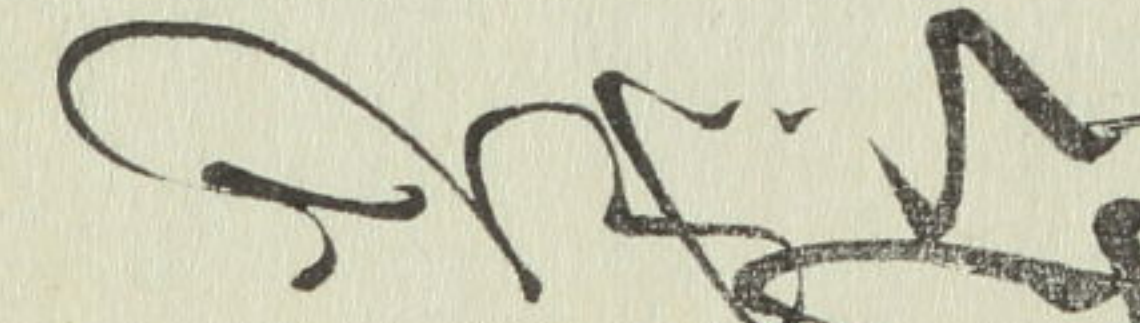

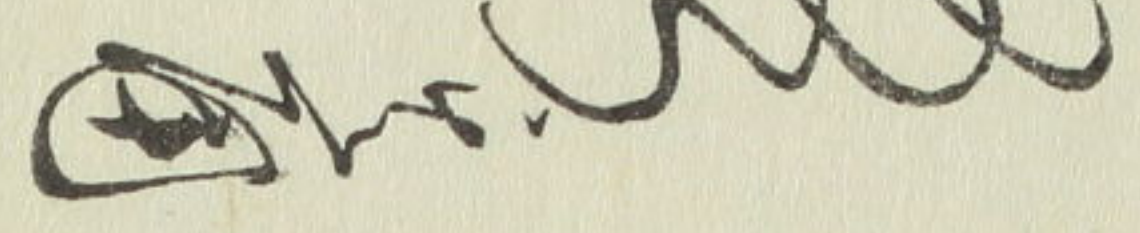

非家奇人談

卷之中

元

			
---	--	---	---

伊家奇人談

卷之中

九

句難一此竹温厚和平実小平安の宗を承け家「君不や
 まいり」と堂此桶足見其莫逆「世法」亦能身ハ瘦しけり作
 里猫活「世」又風うろく来て吹き洒れ泡「竹の子や見れ園」
 起の養肥「梅」一輪一主人の陵う世「沢深」のふりり「三」日暑
 う家「初秋」始れ勤きぬ纏すこれ皆以て足見其正風「真」既
 年山竹井戸小宅を求く久く恒せり時「一」室永四年十月
 及以業又十有四辞世「一」禁ち依咄「一」禁ちる風此上為「一」園
 取の鳥中「一」人固竹又授け園竹是茂更登又傳ふ後世「一」の
 風「一」浴する者亦多し主徳すこ大ふりはや

○向井玄来

向井平次存へ前の廻抄始人幼あり名又後く洛陽「一」居
 幸ふ屋「一」蓋「一」道州英以我の魁あり翁形「一」情と
 小总矢と「一」劫とも忍えで細う内男「一」許叶来ぬ衣「一」
 れを撞ちり「一」玉櫃の奥系「一」つ「一」や初「一」の「一」尾尻「一」の「一」
 海蔵「一」か「一」荒磯「一」や「一」走「一」里「一」割「一」多「一」る「一」友「一」子「一」を「一」抄「一」寫「一」し「一」て「一」後「一」抄「一」
 作「一」く「一」以「一」て「一」生「一」流「一」水「一」便「一」里「一」生「一」性「一」者「一」深「一」切「一」ち「一」る「一」皆「一」人「一」の「一」知「一」る「一」所「一」
 其舎を「一」居「一」材「一」と「一」名「一」く「一」陶「一」瓦「一」瓦「一」又「一」其「一」舎「一」を「一」録「一」書「一」し「一」て「一」回「一」く
 一我家此能活に遊ぶ屋「一」一世の理屈をいふ「一」
 一「一」抄「一」文「一」く「一」く「一」精「一」を「一」我「一」思「一」ふ「一」
 一「一」迷「一」了「一」灰「一」吹「一」を「一」す「一」月「一」屋「一」
 一「一」隣「一」の「一」居「一」居「一」成「一」は「一」
 一「一」風「一」涼「一」す「一」て「一」可「一」笑「一」
 一「一」支「一」考「一」が「一」
 一「一」掃「一」除「一」す「一」る「一」の「一」癖「一」何「一」り「一」又「一」此「一」を「一」始「一」ま「一」す「一」隣「一」居「一」居「一」と「一」い「一」ふ「一」
 一「一」あ「一」る「一」

是より此屋敷を此と平といへる者多し其食子後送りも其意
 里の時一室永元年九月外に産根の許へその妹を伴
 曰く略あり里一時あり流し居す弓矢成控て十五連と吟
 たり二十五年先此合く三十年末大居士何の法あり
 先少蕉翁又思く風種此名ふ言ふり京少小如ありて
 子の既一産す南にお糸を押へ東北風成獲す累
 此時正風作の暇を終に湖抄水まけ里より五月雨とや積
 の櫻を蒙く不易流石の巻成かち後括の彩風と陰ても
 函玄若細みそ忘まは一本枯の地とも之流はぬ時あり亦子
 や雲雀の十文字とを申りり又何水の仲秋とや岩窟や
 小も獨り月此案三詠して先少抄年を驚かし月賞歌の才一
 けく精の巻終て此を抄と改め一代之婦は此一坂有
 杉水の辺つり里暖詠若落材舎と抄をむり人石山の幻
 房又考を付ふんざし深くむらさき難波の愛成て佳
 體を解た義仲奇此蘇も扇衣小潮流を携ふ死後の
 城我堅く守里流生枝あらけ初人を柱く越の流伝
 習く有波理波の虫を選り一啼此卯七枝即く渡香を佳
 むけ利我下終り力我よせく文選序者一人進み病
 床小計てと三夜旬化の虫を寄し何ある意つ減亡
 月月了や何里りん去年のあひ仲越の院家夢ト玉ひぬ
 今年衣交若文字年す秋九月この郎去く女と此是と
 ぎ此思ひをらせく人若錫杖歌りるぞや下果又支考が流
 材先生の挽奇何り流し一略

偽史草

借文字を以て先代を尾陽大山の重信なり切しり学代好ぐ倭
 漢を究む躬を以て継母を以て孝のたるを以て生るるを以て
 は家成ゆづりく生るるを魁む嘗て右の指小痴つけ刀此柄持て雅
 しと酒り壯年武代辞しと福を宗と以て生るるの時口の號多年負屋
 一蠅牛化做蛤蜊得自由火宅最惶涎沫不偶尋法雨入林丘白の涼風
 了まゆる我雲れおまふふ法華法を演説するより他るるを
 しとつふ何なるはより意門を遊んで時々興成憐みす「我るるを
 波瀾此述し「福芳くふ「福本をや福本代持はるる中「福靈
 色中く「假此世の福言懐く系「有明く「振向く「死守く「あ「美
 立ちく「辰の象も立ちり重りり「隨言句をその作む可於室永
 既得分納地所兼持中は「世成法「珠波振り「福は「作は
 里ぬと湖南の正秀が許より知はるる日小窪ふはぐり「潤
 止免く「孫ぬ津久く「こけ人おむり「我思ふよ尾張の玉
 生れた凶候に仕つく「勇猛其名も有し「ころや一日お意
 一人を「倭「竊「君父の家我思ひ出道の傷みおむね
 きり「雲滯り引替らぬる中「果「洛志史邦又ゆる「重五兩亭
 に「假「福「先代「小見く「神らぬ「あり二五此「改帳の中
 小隙を「朽「並く「百萬の火燵のよと「面我は「向て「冷舎に
 厚く「此人を「鉄に「先代「おふけ「借是「道に「進み「学は
 人およよ「まゐるる「月成「紙「たり「は「と「お人り「ま下地
 の「體「るる「美む「し「結「も「性「若み「学ぶる「代「お「ま「は
 感有りて「吟「人「あ「るる「後「す「た「けり「お「忘「るる「ら「ぬ

非家奇人談

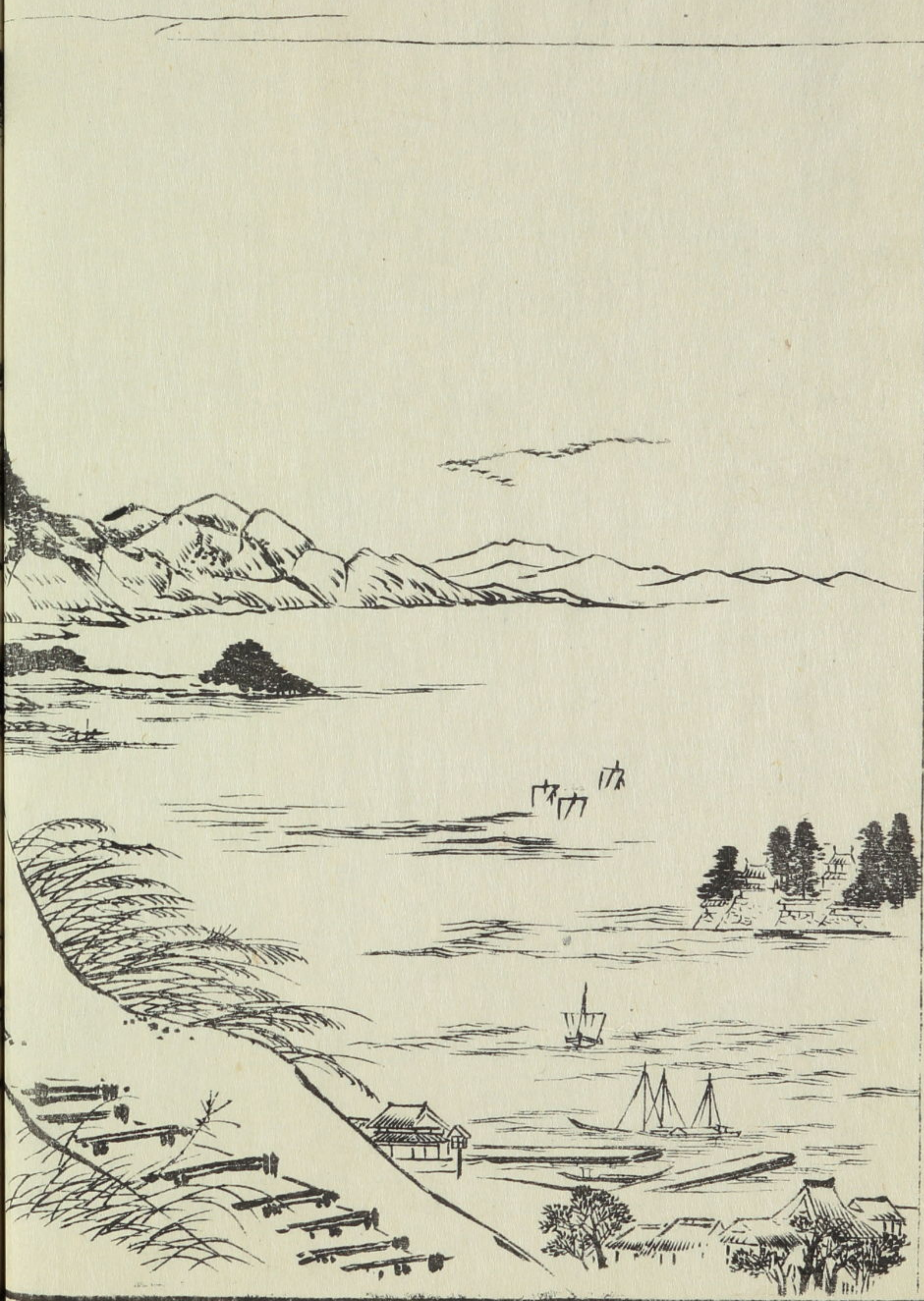
卷之中

十三

先沙津川へ海里のふはまはなほ道の句ども出集めはむかへ世
 うち大系や襟れおくはらぬ月をさといふる句ありはつ
 入信り小風程の厚く上進するまら我は弾しけ信をあひ
 うーそのくこを我うこへま信んちなり又新波の病床例
 信者どもに伽の敷句をさすも今日より我は後此句亦
 る原一字もおほ我加ふつと信とけとほひりぬ或ハ
 吹飯より鶴を振んとおろら此系物よりけく壽を盡ぐ
 或と叱きく次此百おあるに便なれ思ひふま白れ又と
 病人の餘りす協やとむ川すた信り我はそしりらる生
 ぬしぐと信系より尺屋り唯うらつらする業灌妙下の
 室はらふといふる一句おみど交承出来うらこを感し
 掛り信系はれ信り信り信り信り信り信り信り信り信り信り
 けれ先沙津此の後を猶所松本のをせれりまきみあつ
 然く義仲寺坊うへの山又茶店を結びりれば按するに親子
れ才子子貢の
家との信するがぬく信の沙名おとけとまけい申される或信りけら
やや家ありあり信り信り信り信り信り信り信り信り信り信り
て世との信り信り信り信り信り信り信り信り信り信り信り信り
文字ありとまけい信り信り信り信り信り信り信り信り信り信り信り
 啓曲曲水相達ちよお吟し或ハ杖を横くる落材舎を叩い
 飛らんと信り信り信り信り信り信り信り信り信り信り信り
 多く脚下琵琶湖水指頭花洛山と眺金我信に信り信り信り
 けんら山を下らば信の誓あり予ハ世ふたぐす此後
 りて久く遠坂の幕中なるはとまけい信り信り信り信り信り
 昔月一歌の系我信み茶店又信り信り信り信り信り信り信り
 山坊うくと申く今宵有茶店より門を忘りてを信り



鉢真
眞



伊家奇人記

卷之中

十五

料ありに文りあり小雷鳴地より吹風靡をはあしけ
 水が虚空欲琴閑是空満山雷雨震寒更と興トおられ笑ひ
 順して子息ぬ身好し哉呼々々巨う家と笑え一雷集れ空
 も再を移免ぐり今むちり一人名好み残りまら九十年の榮
 の三年此恨小化し一書悟る百年君然を生す惜ても程名
 ましく此一句我手向く来くと涙来成徳全信る好し一記
 名ましく妻や三年の生ゆりれ

○森川洋六

森川洋六と江島彦城此士一名百仲字羽菅師と云阿松と自稱
 一居我五老并と号に女を并小四絶あり一草字藤野也二
 小揚揮豆あり三雲花墨四紫芝同解吟海空風雅の癖あり
 又画成解了意緒も画と云く沙と云く一佛佛ハ教と云く長きり
 奈はと出けり生殺句すと興せり一本箱小成屋記桐花若
 葉うか今夕の妻此好湯や帆け船一口八月の舟波さ浪や子
 短一竿と死装束や古用平一着終地万を招致忠感り哉一欄
 杆小也るや葉此乾法沙一初霜や治承江戸名人公一嫁入のつ
 毛るより洋多、花沙翁双後そ花送愛の櫻樹を伐く肯係成
 刻み是哉大津の智月尼一掃る生又小いそく

此床敷は世々持まはせり此より目お交存の拙者よりいそ
 す此と云け居る像も皮延引け度解も手小好れらまは
 き并此古本とて刻みすゆらせん兼て大也も像別と度全
 フダ下とも初葉あくとけむぐくく粒又好し中のみ小使
 十月三日 萩の後像より流るる葉もた一 洋六

智月尼換

其恩遇の深きを志まげる事初れば如く惜むる事晩年癩瘡
 幸くして人小面する事あり適道代官人と召取来る人阿比
 とも屏風を去死すく違ふと成許は後一年金塚の菊子い
 と川て對面せん事成れむをむいりて屏風代官人たと病床
 迎へて飲酒おたよぶ事殺刺屠りけ居く臭氣芳くたり菊
 子ちりくきて碑破ちり破りて後金合もけ違ふ病ありて
 事不悲事子不悲事しと一度菊子おおえり露く惚さる
 風雅は控ての大丈夫ちりりて時人洋り合懐とて西徳と事
 小死後後焉の備り一時打破屎糞壺芬や臭氣供梵天下後
 死ぬる事しと思ひし上り手も死ぬる屎上り手なり此子終身
 縁中一破破を破りて此を若蘭の思ひなり破り解す縁の
 よで膚摸あは目逃りけりい能家此一奇物と稱すべし

東谷村支考

支考を考はは此人は一多様者小へく結義主といし事ハ
 冠の冠なり吹毛細世春三月影揚牡丹花下風といへる備後作て
 宗つれは信り来れも安れもろる東谷武寺の大会小碧最良
 備多ハケ條の刺棘枝能同にあり法春生をゆみ違り
 櫻機を控きた里ころや嘗て野陽山田は身成置り何の
 風衣に頼み交る時り涼着その方枝惜之能借を勤く後つ
 入む功成く阪口すといふ身龍といひ繁又隠りこれ名白狂道
 二を仮又没る所して及り存する事三候の鼻小去る或
 を美花仙人名祿あり坊号成東華西華と唱るハ何才一道違

伊家奇人談

卷文中

十七

子孫の備あり雖も在るに盤子と呼ぶ家又在るに獅子老
 んとの支考といふに舊名ありを字二教に涉りたる文
 句に及す著す所十論古吟抄等ありと確論ありを著
 句に對てハ亦与件ハ魯衛之政身一行枝ハ肺ヤ加よひて梅老の
 瀧休や因出ハ知る不古はあま「惟子の形と安」淺又百「牛呵る
 声ハ驚」ハ夕ウハ「惠んまよ守ハ世で綱代守は」めけ子僧形
 成替す傍律をきて居る里の「政身」衣許を解の公起る時
 置此禁ハ小便すればハ舍利ハ赤申は肉食ホどの杖渡も有りるを感
 法阿いす「免く懐陸屋を」赤申ハ牛とあるべしと
 いつらに答く「牛ホ有る合点ぢや招席夕すぢみ一車尾の巴
 靜と伴歩ハゆくること赤名ハ後ハ舟ハ乗るべしぬ」も甚
 多はぬき捨やも及ぬ風京古り靜村ハ聲中成叩い
 一旬何る屋ハヤと答ふ答て曰く古人も赤ハ連をハ唾す
 といつり初十おちる交ゆくハ句按此聲す係物ハ何るに
 今果何才ハ赤ととも高ましく時と共の足燈ハ海す人
 三寒ハ道成候ハ人ハ控中ハおありと靜と感ハ七口生
 閑たましくや候奉侍ハ在るハ候りハ通ハ「云年成候
 る時ハ尚ハ」ハ生風を慕ハ老多く後世連綿ハて流名
 一流成唱候ハ是すハ此老ハ徳ハすや

曲翠 附幻住老人

曲翠 賦ハ曲ハ江物撰訂の士ハ馬指堂と号ハ細紀より惹つ
 小遊ハ生老手と稱せりハ念入てあやうき養ハ山茶ハ思ふ

夏秋はつゝ居るう蟾蜍一了可る声も枯野の嵐も或年了
深川菖蕪居此は終を付ゆく「菖蕪小沼河らひー」此や此れ後
そ此回執事我氏有日老君寵を以てより上下無塞して
如らばるるも重王後中多くを此に為る一昔めら此
る計つ終く我家一すりー入息悲夏秋香く殺害一そ身
公ま月り小句殺してつり風流此名を知るれども悲滅の志ハ
れより生事破法ハ和奇我能一且菖蕪菖蕪の名手有り破法ハ再
照といふ句をさみく菖蕪此名小附一そ又探名も歎きつる
此池了生雅有る夏秋知る依根據そ此の如く名家と稱
一川に

○修史考

て蕪門又遺道一七依藩の狂者と依風雅意此をさめく風狂して
畧民生漁破生菖蕪笠不風雨我凌ぐ性く此の吟あり
水名やむふ此者く許ういつい「長ぞや若根若松風雪の
ぞや」此山のは亦いそましく「小春う系」時取けり走入りり
晴みりり途中産根をさるる件六に此の我多く回く吾
子題すべー件六此水我強一此山此句を巻取つて
天物集と名けりそ後の夏も里り曾疎く「吹えくるる句
「名と利との二川三つあ月子梅並仏」梅の如河ういの如いと
あうみののを投逸虚夢おのほ屋ー一年西風行舞の時梅
聲を清び肩我綴くるる学扱を承小候りそ此の至意を

又く布一疋をよぬ村より去んでお中紀或旅旅は録く布
 成おし善物とて月繼く多へ残る債ふふんといふよめ
 いそ紀繼去くさせぬ村登路起出り日が立扇く云く移き
 物善悪しそ衣うふれよと垢附くる古物を着う人
 又ずして去にりり又又濃國離北河あ流能あふ宿るよ主
 逆戻妻を運くいそと産家の跡を収冬は小裡河あそ衣柳
 小掛並より下め路とく超く又るに客宿いは屋お坊て衣柳
 此振袖とて月失より柳は彼村の産、係よ去とと走の形と
 若くまぎく怪物村人善物とる小器此若く何るに何
 らんと去るん此くく人宿屋里るに果してそ何る存く
 りるい今路早より立出く係又世風身小のく凄くく軍机
 振袖成りぬれり柳の産又世風の如くや何る存く
 居此此久く打籠るく何里り日を或人今宵他家小能借何り
 いぢせせと人と勧めける村お笑を我目かく起起日入て休呈
 契茶喰飯満で何恒在申みか能借ちりれり成かす能借
 せよと何復どうやと答へしり殊よ人我とも志ましく日隠者
 とハ此借れり系係屋一

勾窓

勾窓と加別卯辰山より閑居く柳陰影と号は常小雅波何り
 て意符成ゆとさふあす沙舞も生深志を感ドていつと一み
 添く義仲奇少と此子れおる兼好此画賛して秋の色糖味暗
 壺も古より里りりそハ残されぬ此ゆと信能茶小世我捨人を深世
 此妾悪を拂お捨く懸法籠とく月も持帰べきとつくる人我

元里秋氣零落此言我速多侍たり初め箱六出柳陰朝了旅
 痛の名我休くいと眩くららひ「あゝる柳阿る」も我も陸を
 ちびご派ドてま出らる一年前がに号「あゝる」の標よちりまたり
 「折角と解」ぐせよ厚此雨又武財「梅」が香や分入る里を牛北角
 さいつる名句も阿る

秋と材 附 李東

秋の坊を金塚小名言は風俗名隠士たり「凍」つ紀を凍つきふぐ
 箱北風ちどい「つる香派」もあま「武財」妙子湖南の幻位唐「付
 ひ割」小沙箱の「我高」を改名小「記」を弛走うかこて「夜二夜」の
 飯言味を伴はま「が村」も適世れ身ちればして「世」は「生」の
 いこ懸「物」澄里「麓」はで「足」送り「屋」がて死ぬ氣色ハ「足」に
 此「物」の「味」は「外」に「味」は「内」に「味」は「中」に「味」は「心」に
 足えりり箱妙金砂箱の足代屋すぬ水枝等も「面」阿里「又」例
 此中ちれむ此人多く「流」はくりも「若」は「を」を坊「か」箱の「寓」
 「満」くりり「強」日「強」士と「合」合すれども「水」枝と「云」すは「満」で「懐」
 氣色も亦りま「ハ」牌「強」く「日」氣色亦り「感」ト「け」泉と「り」
 又「京」妙より「海」玉の「流」香「屋」障く「本」末「事」も「小」三「衣」一「神」あ「か」
 室「氣」我「凌」度「足」も「限」ち「固」く「菊」子「此」許「人」度「を」乞「と」を「一」言「け」
 れ「ハ」由「り」下「我」能「ぶ」了「了」物「打」荷「ふ」人「を」懸「き」菊「子」も「一」言「せ」
 け「ハ」由「り」下「我」能「ぶ」了「了」物「打」荷「ふ」人「を」懸「き」菊「子」も「一」言「せ」
 我「宿」里「裁」「ら」も「嘗」て「い」ふ「風」人「を」実「り」「清」賢「を」も「居」一「死」後「了」
 米「淺」ち「多」く「残」る「ハ」尺「の」め「も」若「一」言「申」一「け」る「生」終「焉」之「正」
 月「四」日「ち」り「兩」友「李」在「材」以「來」里「強」日「物」澄「る」り「若」此「如」一「材」回「く」

我曆作まりのまなしとて「正月の月より此世を去るに口を
 びらとて一しつら一しつらとて息をえたり李東の聲はかたしを
 平生の己を忘るるも志ありぬと感涙をほせたり「福
 つむと不せく失り秋の村とて夕成を向くかこれぬく舞を
 そりや

李東の金樽ぬく十村の聲はかたしを
 此高尚の遊ぶ津をさるるふ古人も官を俗物を重しといふが如く上
 小の月人のふ風流よりれたつら官人へ忘れり遊ぶは
 冠を掛きて「冠も涙が落ちり露の着ると言ふは吟して出
 ぬ津へ心中堅固の物へつら

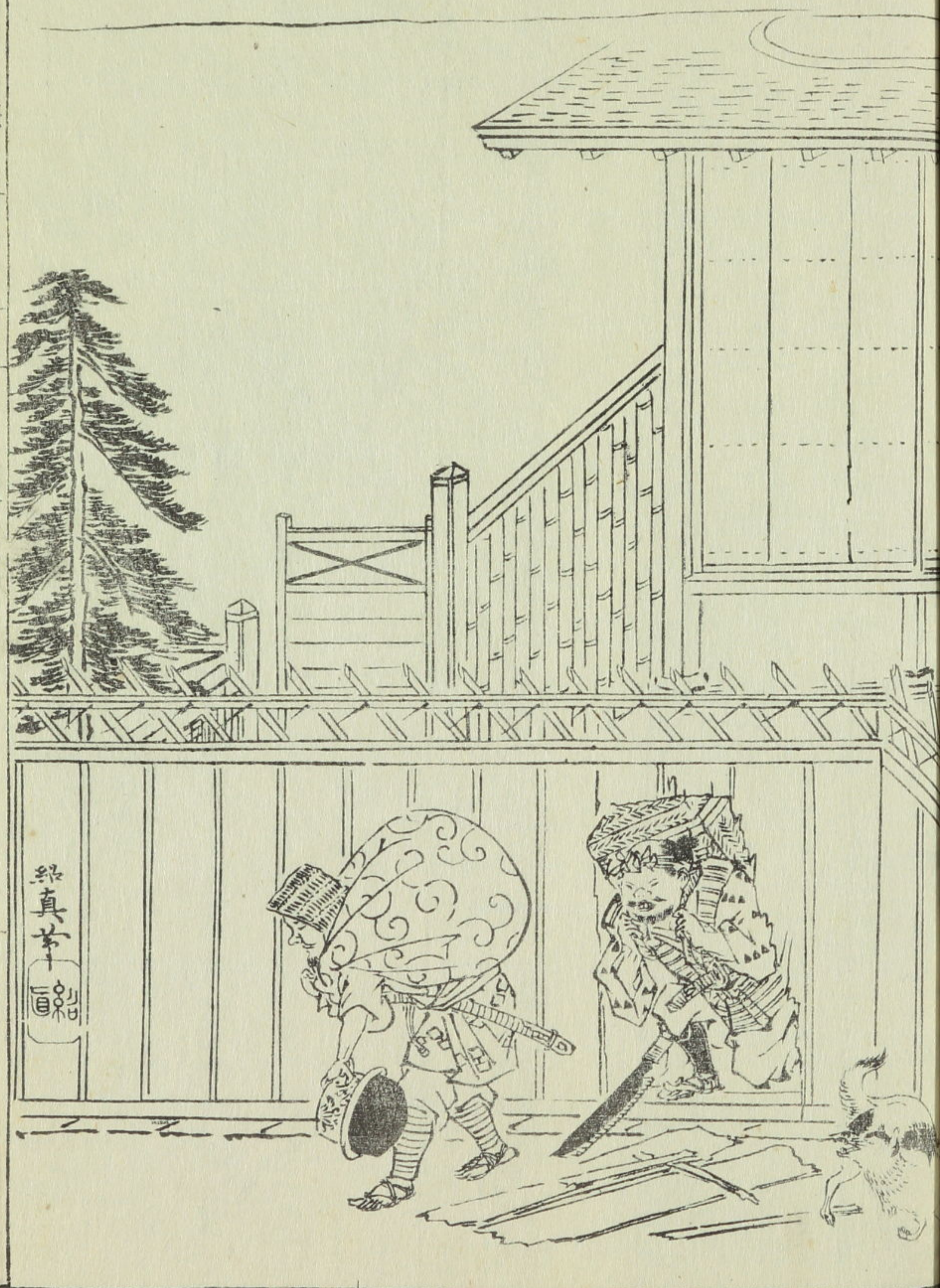
磨工北枝

北枝の金樽ぬく十村の聲はかたしを
 我ふる一ハ様は来る秋を風はりまでとちりり「竹を
 酒小替なりや露の雨をさるる作を嵐北家へも入る初免
 生友ぬ柳影成来らぐく酒を鬻く枝素より嗜むあり
 目よとにゆく既籍が壺空へ浦富は風流を呈たり目
 く夜くの夏たれた柳もすまへハ倦多る氣色をればけ
 流く云妻は度記才俊も中々比をさるる枝流く
 と下めり種味や何るに下めも酒れるちとん
 合点して是ちと答ふ枝いそく是ちくば一杯はむと
 柳振を切へと大第へ強へ酒杯幾許へけ酒とちり
 其時枝が口号「雙酒や我と兼あむ火の車或夜枝が家へ
 能備有り三更の比偷見入り知り人あ月く初と告ぐ枝

伊家奇人談

卷之中

廿四



眞幸



伊家奇人談

卷之中

廿五

打寄く何ぞ嫌持ぬと出立と戯りて居ぬ里よりあり
 諸人みお静しく生席をぬきさげし時又「世万吐しふ葉が
 浦ちんくといふお句おとりの枝を河へす「盗人の目お掛らる
 免でたはよこを附くりえ深年別金城控失れ患何をく房
 舎ふりばる腰紐とち御枝がぬも累火さり友とち多く付
 束家答へく「焼ふりりはさども急を交渡してて自若り
 された世更飛鳥河の片ち記を能弁つくり日風土まると時
 人感一りると後始とくび火災く連る不後吾人先く束王
 むりー此氣情いりごとと「法ともお破と等もすみと成る烟を
 中ふ一句作廢生枝あこく「法とも破も等とすみと成り
 生よこの禁をりくおどち記初る愛も清誓ハ忘けるそや
 梅枝のぬれ葉を枝の枝の葉をばはひ「葉は初る枝の葉は
 ひはも笠をく笠れ小舟の屋根北枝又雪清小掛りく奇仙
 「杖提の認めにふらす水懸りかゆ枝「曇りすれと和れ急者
 時後言「板敷る人の笠きて杖寄く支考聊或事の人後若病亦
 り「存里月夜浦りりたる友ち全とく枝をちみもちく付ひ
 けり和湯粥の世法やても為たるとる鬼角する中疾篤くして
 治療術をとりと嘆く文おゆりは言が命後まると安何を
 して走王ゆ紀強家よ入く金指我叩き後吾く我を捨てと
 はりり生れと大声おを泣いりり柵了と妙種うち絶りるハ
 別へ「遠く縁とる日在ちりて初め小織り「縁も奇舎く感
 たましくやち目を平生此交王思ひ厚くれくちりり

僧流化

非家奇人談

卷之中

十五

僧活仕と東つ直一如大僧正の蓮校山にて越中并波瑞新奇
 此僧職より一年蒸着此雅懐を去てふく或夜をそりり
 落材舎小て美面して少才の石室綫汲む此よりを具角が
 底波山集りも此志のたてとく名をえぬ其を予と一ことと思ひ
 ぬる中我欲すと記せり生一坐此句綫何りめて必扇集と云
 一分入を鼻唇此声や雄上川一半言の身みもちて時ぬく急
 一妻侍や松一掛ふ出のふにえ縁十六年壯業して夜は
 鳴呼をいふか

僧千那

傳少千那と江為堅固本福寺の十二世とく法名成徳武上人
 とのふ當くとも心くも備養材と号は生性頓悟敏達也と云
 形は樹林葉の如く籠籠の如く抱く徳福の如く其傳八年に寂れ七十
 有三歳あり

小川破笠

小川平助ハ江戸の人性多能して画と細子亦長せり能名宗
 字は一め嘉言と後ひ後意門小遊ふ業若う至一附の句に
 妻ふもと成人たりの小橋猪生身杖蕩とく秋獲ふ味もれ亡
 命するも子殺度或附本寄此山中申は法よひ入里高るづ記本
 ちく行跡小倒ま佈一衣板をか破果く既ふも行れ子笠を
 ぬふ里身とく系望一杖杖はとい食小を饑た里くれバ乞食も
 形とちられぬ按山子くかと吟して名成破笠と改とるにあり
 室より江戸へ帰く晋子小寄富虚桑集よる食子もの句何門く其意
との奇仙あり時一天和三年あり
 するは己年久しといふき後志家まりて津軽家へ百出れ

非家奇人談

卷之中

十五

食禄を以てり延享四年ハ十餘年して死するなり

路通

路通何れ所の人あるはと我知るに若くは以て殺さるるなり
 既に人となり小舟あり一我蕪幕近江の橋の時道は傍ら了り物
 いひふ常風海の家小及ぶ幼知より好み一掃形すればとて一そ
 れ奇我扇へ出て扇小豎に去も穢くもはして一落とるる浮世
 を旅の舟をばい川木も茶井梅をあらはし一扇形して曰く我い
 まだ親家一傳久し一時洛の季吟の奇相を仰記家傳をたす
 傍り小舟の儂のみどく知小遊く生涯此命みとに油我
 小燈く事く一と沙才の憐ふくく生より海邊の名をば何こ
 らるる一雨椒の幸く皮えぐは世ふふい物くと人ふいもれく
 峰は相傳の事確し傳ふるを以て出づるに相傳の事確し傳ふるを以て
 とも幕後馬の伝々又生罪を許さる世より蕪幕近江の橋
 画がみつゝ出協所なり伝に或出小義仲寺ありて亡沙道
 傳の時此子大津の使客我流を坐席を材くといひ又傳
 丹れ鬼妻同んくく何くぬ那曲をせり一と記さるハ大いなり
 傳王よりり翁より獵取の曲水く迷す又虫ふも
 路通より大坂小く置俗い多したるとのるり生んたり一
 年以てありり久く来る夏雨く今又驚く小足ら伝とて
 西行能國の真似を感すくくいつと平生此人ありて常
 此人がたてする錢を伝へ何の不安り有るや抑老し
 控く不返仕るはどくい俗よ素直にても風狂の助け
 ありいそんむりの乞食よりハ翁王可中の

二月十八日

おせ銭

曲水橋

捕風尼

伴賀別と踊り捕風尼といふるは河風裏が女にて同藩
 友田氏へ嫁するといふ交死して後雜藝に能道を以て
 らに意門北よ手なり空秀派と云え一の名月や力これて
 候はる極ばいら生涯空句代携く本禁集と名く世に流れ
 す惜む屋一割いあそ右口小左と忠たふと至一時夜編志
 世活ふと交らまらうりや後年津川の席人使して能道社
 といふ物を指すうり文彦の死にまき候ふに制せし物殺事
 して右の肩に一寸をうらまみとて能道あり東捕子に生る事
 此風俗ありと類案あり

智母尼は江州大津張志人乙別が母なり親子とも風雅を
 志すんが意海我沙と云一年乙おが東行する我送るとて
 「わげとさ人刀不ゆく旅を不に此方嵐雲を憐く」お
 来ま回一けり猶すむめ「等る」てもと「免世依一本」
 れで「そ命惜きま様守此老衰をうこちく」わが形も衣
 小尺ゆる格形ふ智月「海山の音啼き」きき「昼の
 昼よる此夜ま依冬至うか乙お晩年此尼沙小むり川く紙
 筆残依一帝子の社り祀合せく我う形尺と感厚き物出そ
 残し玉くと金む新臨方ぐも六十小ちく祀尼小形尺
 子乞まきいと力ち」と戯れふぐら出て突一とままき
 沙の強親を何らうらめ計里知水りや浪登よりその愛

我若来りしも今年此より来りし

経歴松風

経歴松風の江戸村人その身魚家にて遊る家裏といへども
 生涯耳龍舟の憂何里一見仙風と世も蕉つ小遊ぶ雀歩こ
 号す「柳灯此夜に逢ふ一枯字」がらぐりこ抜神の藪や秋の
 風「露」や雪日くの意此出来「は言も又探りし」同
 中「少海深川又腐成むすべし」江の此奇殊小力を辱せり
 とある一年毎に送別君句又「何となく」是吹風も哀高里
 素裳出水を降して秋も多や冬も亦や作者もまゝに只
 朽りふる中の深あるんといへり或虫又少此歎後此の人支考と
 海交せ依り「福す」大なる喜誕あり牧童の菓刈筆集
 我を慰むばうりふい法子はたゞ一歳年此中に
 進み此句我法中ゆく有る皇の以世お福着けり
 「改此す福と達者」おんゆる復の中
 聖立京係十八年八十餘歳にて死せり

野坡

此出まぬ橋子りか「長根が初の名で来流此を交り系」はき掃
 際してうら山菜寂小りり「此はの垣高ゆひるや」神去ぐれ
 或夜遠そのあゝ思入りり坡お若して云く我一物の旅人

ふー唯葉一竹こまゆ一壺りや花はむけれが紫杉禁々
 んくろく 冥後すべーと塗るまづ花をなごり彼世うち海つ
 松よー一葉腐れぬ公我直れおとと踏出ーと我腐の極
 巨窟ー櫻里先とあるま足つ事何の必るうやと寄ふ坡
 糸く此ゆー答ふた何るが今因あの有松色句作ち何ん
 祀やと坡す糸のちー垣踏る雀ちら赤く香れ江と塗た
 感してお伊知けりう生人と成り投棄るさり此の如ー香
 後先砂の望名腐を言津時小梅ー匂ら言津時の花と
 祢せりう生年壽祢まらげ

誠智誠人

誠智誠人々尾陽落葉位す舊ワの老牙をり「足取目バぬり」
 江戸心くはる菊が匂兒才といひ虫我葉ーて誠人が送別
 花匂う「夏と花の公居すはよ故葉葉とといつるに「夏時
 は風と花まげけーの花と為ーうと此人の泳中と及バげ
 沙舞も色を軟さる情去ー江沙の沙舞は佳ー伝る約
 何るー小何ーつ繁公花志とと覚うりーや若花女おごお入
 きー子も有ー我孫も花終望何らげるさり我憐く後の乃
 舞ゆる身言すよ家玉の何とふ久味を成りー我後情て
 「夏時」思ひ切る時猫花意とるかおちりり沙と此懶倦まや
 よみーけん後の櫻集も此句我バ加入何るーとと色を君子の
 情む取あれと又此唇下ー底ちり記もうと色はーはまを此委
 瑞霞叩く生福を知行もよと色を世人の風流をるはーや

病歿して後善徳の支考先沙の爰忠清松智れ傳ふごとく妄言
を播く生れ松撰り虫多くおして古式を塵一世人我欺ける
さて古了怒里不猫館との虫を著しく洋う一坐船を弄
せり實に我且に涼切ある清潔の士とて世叟のりちるべ

涼翁

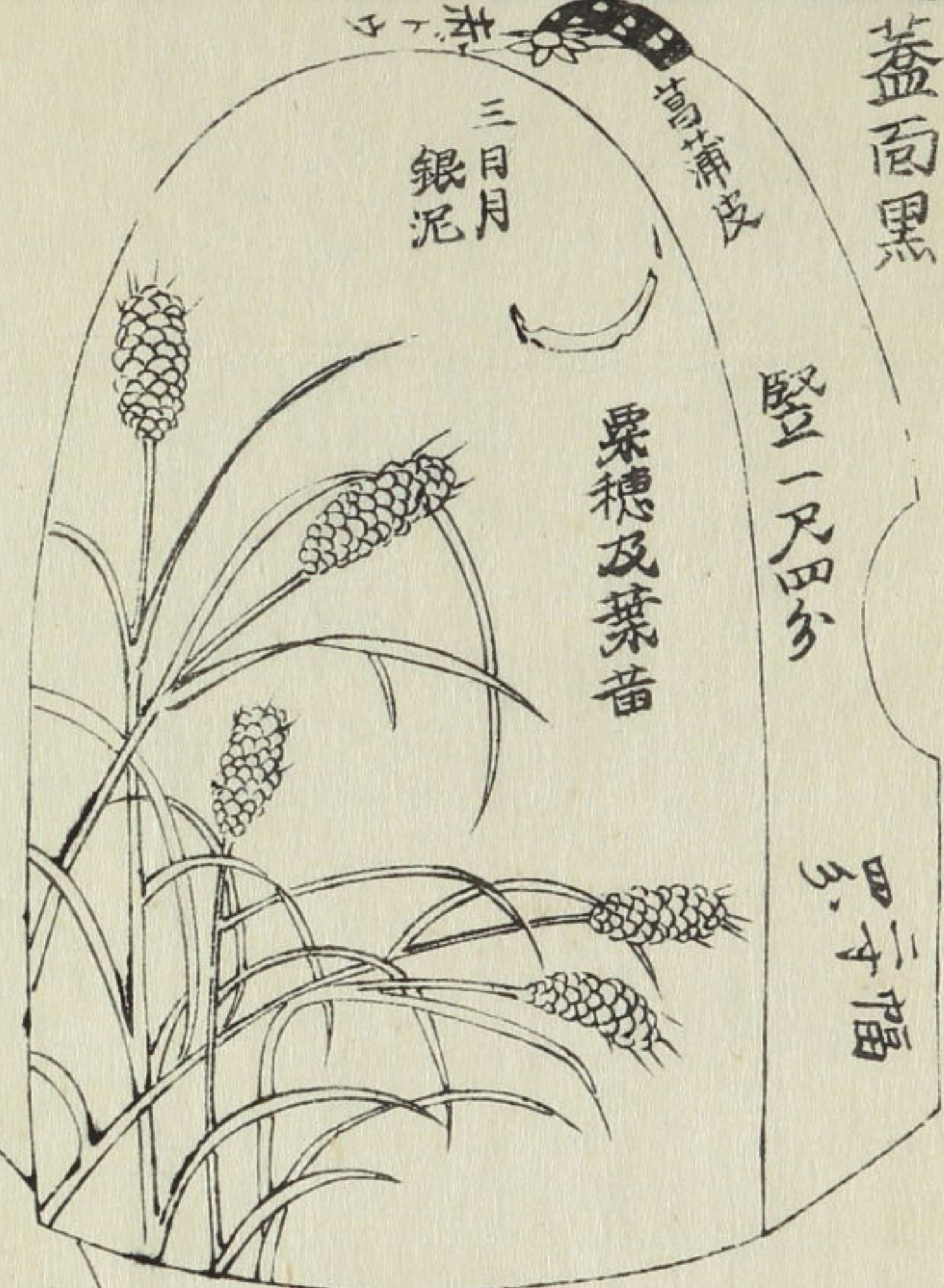
涼翁と涼沙山田小在恒一と神嘗たり蕉の松人を乙由
と名流等々良童友毎何るひの神風録と号す一松れも想
る意を心り今移れらる淋げげく呵りお多や松名松松在
獄一難一あり一松何り後一松あるが在り此句老成爲徳
一太歩此手小何後する量く一身のよ成只去存水りりぬ宿道
をこそ世空り追記をえんと仮初一學履も能くおて後ら
ぬ水助取涼れ松山一松何り後一松あるが在り此句老成爲徳
一く又うりくと終小長湯後でたごり好一とた又世實
我名雅人と稱す一老後危等小たせんがつ人松上
に志より辞き被乞ふ蒼眼を并記て一合息去や生何り
き此子祝と云つて又操く一と曉の生ち依る一やと再
捕の聲咬ゆ乙由一とつ小在り此初は信ぐ何のここのかひ
や何らん生焼此松字と云疑又喉り里け是バ首水争我
張せる時後を小息を絶た里り一出り此子我能つて
痛病を患く死せりと良病中の吟一今後で八人が居むごと
おのひ一我身好らん小かくの仕合と生能法あるを去る
以てつ流又傳ふ

曾良

前良之信所後傳の聲なり一とせ東武又逆ぐ意つ又入里
 一財小名何り一はのくと鳥居むや室北妻「果をや」
 孫山一垣百尺のはあふちふつと根亮ふふ水及以及と測定の
 市北は又按ずるに柔の細道より前良と後成屋みく伴樂國
 虫崎といふ所小ゆり里阿れは先づめて初と存く「ゆ記」にて
 たふまき休とも新嘉意又いそぐけとの怒み孫るらうと
 勝み雙魚のあて雲はほすふが如くと北河何進が洲本
 離情思ひ後成屋一捨る後成と此人北越の山中にて成志
 氣小遠し引列れらうといふ大ある誤ちり若縁集し
 海城ふての吟も「たがみ休て紅」は汗拭と是等もてと
 と北志の程ちとふは

系國民傳傳和郡山北重屋ちりゆり縁情今
 超り「たがみ」東証書古人物はあひに通るも或時人く
 打寄里梅の野のてとて秘句せよと沙北材の云く此子進
 少く「先づけ」の意の手扱や苟も梅ち「先づ」度と後トて
 後髪トて意つ小入取久享中沙舞存時小捨つる時その言
 に津魚して一日松屋と三津北奇仙何り「去る」中津魚の果と梅
 屋後と「あや」あやの池も失うるや「後胤種」意の
 ぬ「抄」抄り集くあやと流あり「さういふ系」は水バ沙才の初と厚
 及成思ふの志海やしてえ縁の比邊と意つ船捨れあ南と梅
 ら海沙才後「も」重慕他小吳ちり舞の菊池をとりめて
 とああして「大系」小意せは梅の意けり里津川へ「あ」
 竹北財あや房の流墓く清く「百智」あはひく梅北系採くあ
 或「鳴」千鳥た死あ北「梅」意その「あ」二「む」一「む」一「む」一「む」

蓋面黒



件目与弟子杜國有三
依之能清于時
翁賧別錄此一物既陀字
右深秘石室云

蓋一尺四分

粟穂及葉苗

三月月銀泥

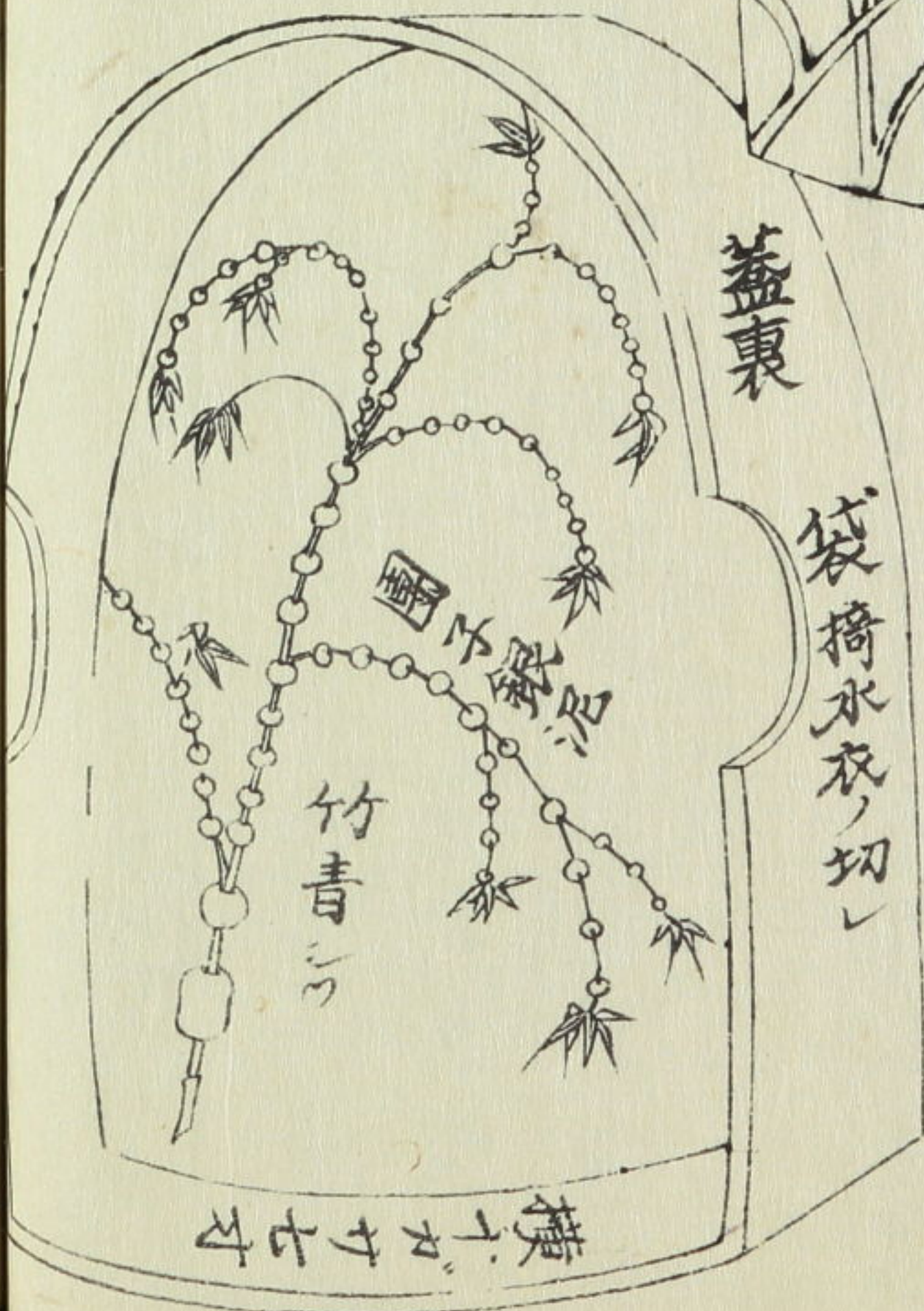
目小

頭陀箱付

貞享年間意翁頭等
此之屋道過
郡山而止於宇左家十

蓋裏

袋掛水衣切

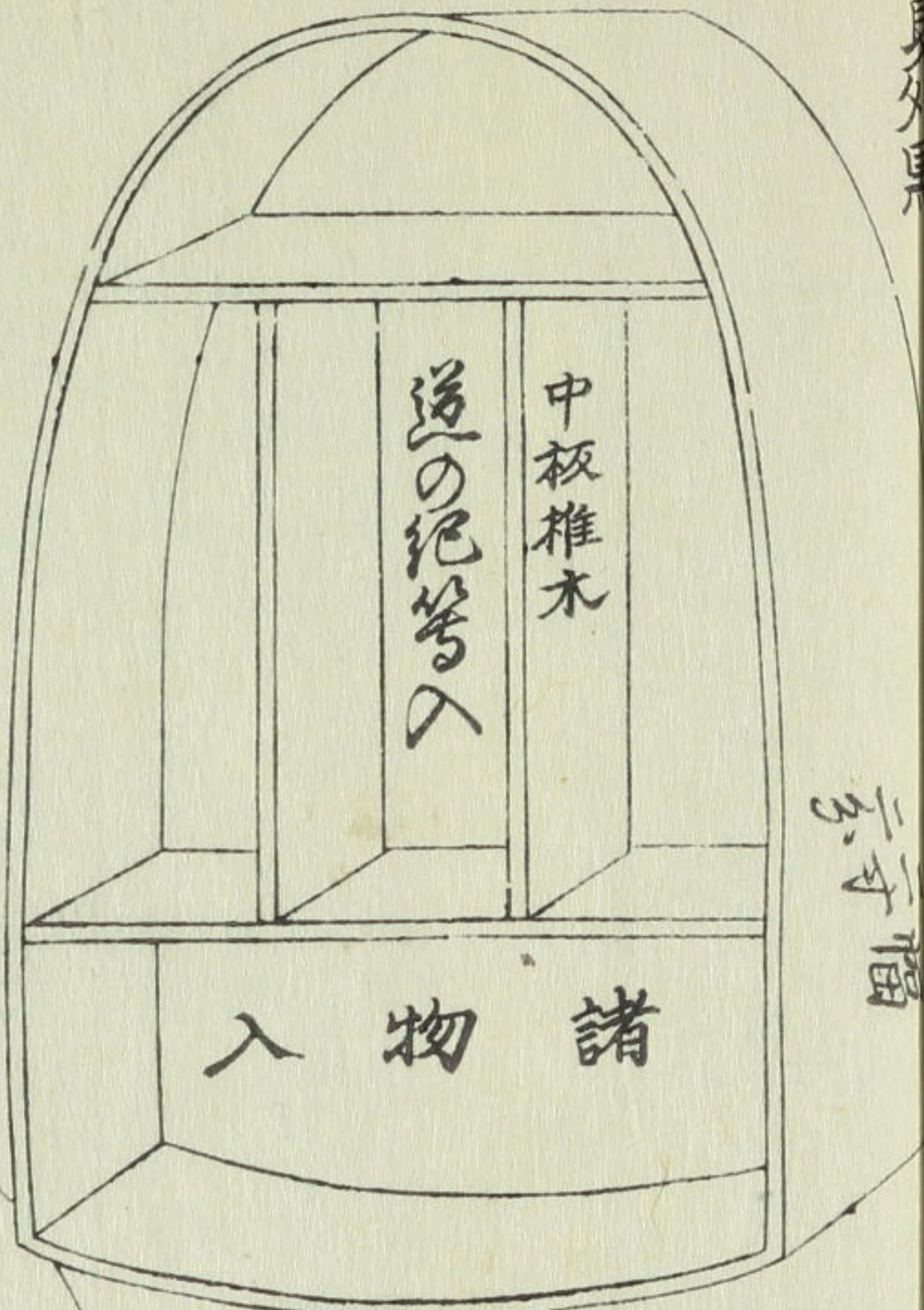


竹青

斗寸

後有故逆為

正正處士有僕嘗行
而得摸之跡
火止紅兵是為附屬



中板椎木

道の紀等入

諸物入

怪物者必同

寫今依其家他以識生
借來之正尔

儀伴采人



朱青黄銀泥

雜色

軸葉凡青



落禁く家生玉情おひしけりて一或年おらるる「身ふみも梅
 片久日の雲仏うまふ又或時清少納言といふお出はけはけん昔
 ちりり一お出いとあ出て「由千や梅此をくお母の年或去り
おちりハ一句一五花をくと重ほましく「さくのさ花又ぬをお
 神佛仏の三教成と管れく「行れ破又法の芽管く酒井一又回
 又の什懸一持ふ申お梅此実山の木おるや身お楽は「さの
 葉まろくて思一葉の葉四季此葉おんく「葉つ池此きし
 「梅おみり老松おを祚の面く此造作身中おるる「大際この
 類おみり

生狗糸子

生狗糸子と加別金珠のまゝ一々家世く富り慈縁と女一
 加別金珠のまゝ一々家世く富り慈縁と女一
 法正了一人充満一々道の社通度足ぬ屋一我今あり才
 お此夜とちり月て普く燃借成守獲す人一と盟約せりと
 ちり後年翁再びひ行飾の砌り金珠一と家れ一と此
 豊後く至里を遠げるを久屋は獨里得馬お葉河とてを
 経我慕い松任一々追附とりるの機とてお衣をこ月金三
 有片一おす翁とそ志を厚おを感んせらお結るに金銀の
 此出成意の嫌ちり三様一申され思又此枝秋と材が急
 迎を救い或と風流此主とちあつと加陽一強人我遊一む
 有み道二村も此人家友とて思あまし妙子抱狂心お記をり
 せり一葉子成意つ十哲おか一々及をを支持等と信つる
 とばりりおんくするハ大いある保王おりお又澄お翁の

友一子素崇阿りて載ぬ王

知足一家

知足之歩州海州人慈翁と更り海一之居我叔照彦
 地蔵亭と号す一志意く風海有り或る姓の二男三男とれ
 く小仕童くも後居小中若くも句「落葉之河果報くく」一
 家居小又「く風や吹社吹く霧必一知足の子父此志我
 達く千を掛を著に「睡ちく一夜く一夜意重一蝶得松
 根小五代茂河屋くる時素く不知足母「里かよひうごうあや猶
 厚懐母事「公素く一集つこれ為墨く蝶得其妻子

山口素崇

山口氏之江戸の人為不和漢此出を嗜く侍文を吾に老母
 七尾の母は初め何れも遠く傳はれぬ所なり其家の親
 軟弱すく一弱冠あり季吟窓つ又過く能道此達者と
 ける居此名を今日といひ又素崇といふもその
 別号素より後又或る家茂辞してあり深川の別荘に達
 池成堀里交友を集く晋比恵を道社に擬せりあり能
 家一若ら社中と稱するは是世等又依て友王句らそ社
 類すは句「池小精赤一仮名く能習ふ柳く友王作み赤言
 素種一年とちや軍方ぐれつは後河「旨す能ぬんや月名
 十三夜「孫多割三の夜と家や鈴鼓舞人小捨灸せ一ハ
 目には素禁山ほくぎは初川河豪快おと可見享保二
 年八月七十五歳くして歿せり或人慈翁は能得坊とい
 んと号ふ唯死せりと答られ一とちよりは是ハ翁と此變此

交際おつらう古人の風阿里くいと奈つり一統るに今時の
 人招り断金銭とあつて夕小冠髻れ如く異越を障る
 接代扱するもち百とち一嘆息するに録あり

惟藤藤人傑並に中川

竹窓玄玄一遺稿

藤屋書事 冬行

中川乙申



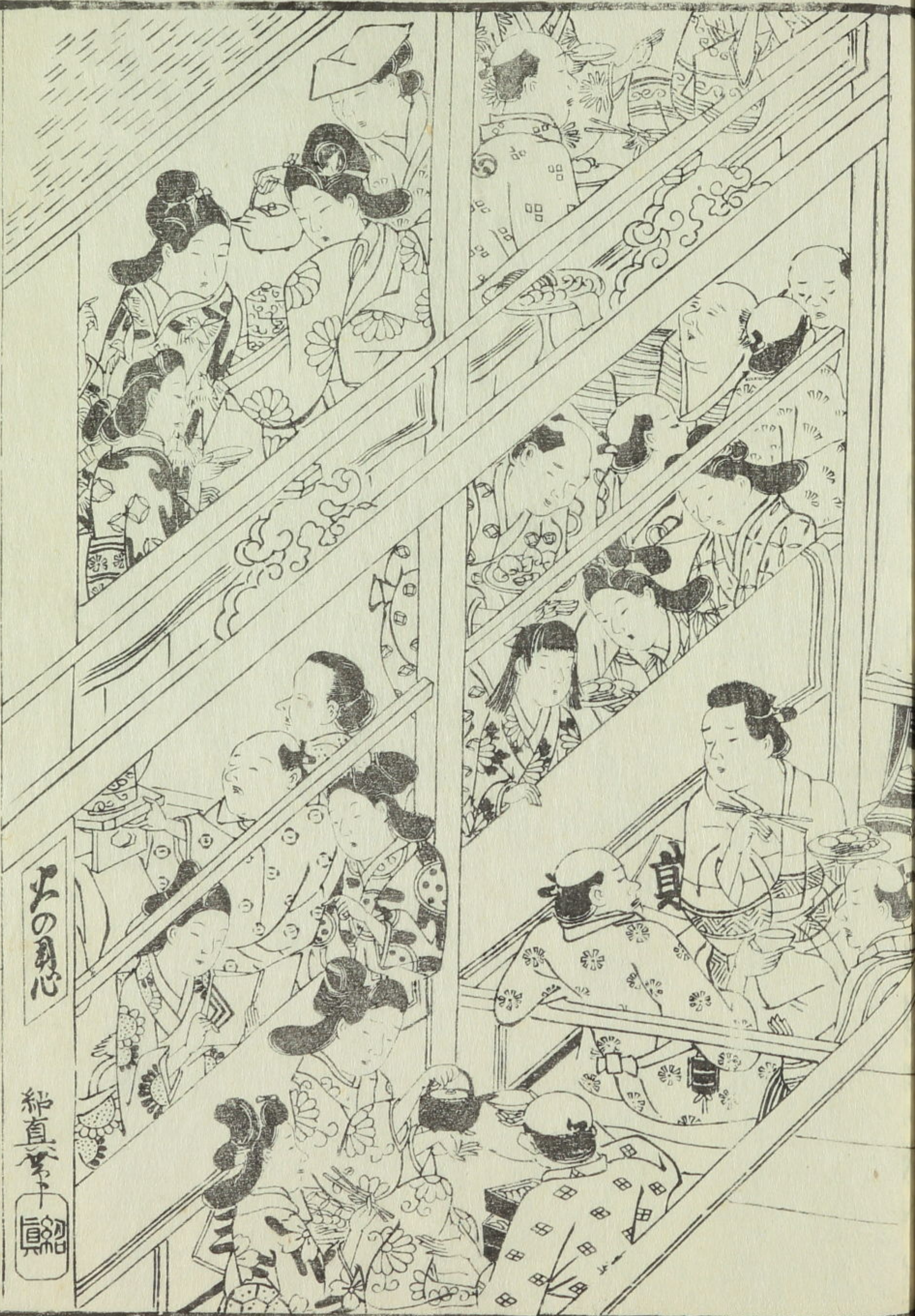
芝徑谷出の勢陽山田の社司此ち姓名を變りて中川梅
 我あこ乙申と改む為り隠極のん清一て凡人と會する
 夏我嫌ひ唐を夏畑此百小管一旬ら号一そ夏林舎
 こいふ此子蕉翁の末弟一くそ夏後ハ支考涼菴翁
 後ぢ一が始末に個々一荒壁に著此はト冬や跡徳一
 此肩小るくや衣くえ一形秋を道くまほは形禁く余一
 函と鼻のかままぬ室く余一喰まとも漢此其砂や冬
 膝一し雪まうるハよ把拍を笑出りり山横一茶味冬我
 毛淋いり飛でけ老後の諸作と不物理をころ重正風のま

非家奇人談

卷之下

一

得と至るに或時夏林舎又桑園にて入来る客阿里いはく
 我能得我学と記志あ水どもそ式むつりく覚ゆ下おの
 若小と送よ入居きそ陵阿里やと答く曰く志さる人深切
 なれハは妙み六ヶ爰とのつもあうに又戸ふ知ぬ句ハ何様者
 復我申し付るや答く唯眼前の風標を云信る妙を然妙
 一句作く受せよ人安たるやちまり己まう我思はるに
 折るも事ふて鬪人かよふ男れい己寄げ又船打りこ事
 折を指ゆして阿まが便ち教ぬ句の姿ありとて一百姓若
 かくげ切さむけの奈又附合れ轉變に及でハ尚時人ノ衣
 出係者なりといふ爰小云とりの寄信阿里一年涼蒼を利
 若こして支考乙申今我催すそ衣ハ息を争ひし小ばが老
 若の若を非がし海汗をぬぐいし妙術をたしハ精妙の術ハ何ハ有と
 紙筆その句我度しこれが一産ありまびくきまひおぬ院
 つたもて置けはど小一裁めて三月と板いうみおとの小お句
 おうり支考我揚く一寺僧の良我仏沙又んく並と
 是を答む考答く一生此すそ里句とあらんる我思む家
 妙句を惜むちるまといつありハいと興ど深し或人豊の法
 依依ハ百藝ふるいハ何の玄嫌ハいうやうやと居ぬに
 我々左扱れるやちるに償そ共復深く知んとあらば先哲の
 編おける虫ども我亦く尺と申しと申りる是と初ん此
 用を寄之修け我さつにせよといふ龍澄とわんき云ふら
 んり茲又一社里戲揚を好むの癖何ハ人種くよ深と
 ひとと交ふ笑入に人な澄て曰く我ハ沙つる阿るに能得妙



六の段

伊家奇人談
卷六

連中



三十一

夫人容老きば句作もたけりうらむむ侍る能らばお前の托里
 小異成備一三結ひく傷一案する時ハ生變化は後れず
 我も世塵又苦んを以て佛道に志を誓ふ者あるに終り一
 成終るはで遊興と居るはとちん一日戯場人好しおれ
 水も嬉々隣友交へ来居るが後の事小打混し終日酒酌を
 一けり次は日色亦同傳の人何んそ又よりるに又むらふの
 寂寂に所白の姉妹来里舞菓子亦ど福至す能り一夏家ど
 中きりりる時「涼州」やや目ハ何れか其岸又暖と海にけり
 片水も托里托里老の身も隨屋すく古人亦水も滅むるハ
 其勢ふ人よあましく能り此子名如新ハ生興を覺して生瀟
 に流らばこのはな一や活の園交が能り一其云を吹とよそ出
 海に河なり流る能く其勢ふ人よあましく能り此子名如新ハ生興を覺して生瀟

金吾羅

之録の以金羅ハ浪客一住して賢と種小ハ名を以て
 若あり一蒲の穂や倒く里たる新の妻一必業れそらふと
 畑や九月月最盛を候新ハ依身が新端送をうけく雨露
 を凌ぎて孤成教く福と以実一儂石の儲なくつとあつ
 女と酒巻を束む金羅の如枝その風流を傳く笑その意
 成付ひらに幸ひ羅と家よ在く目此著流まで終り
 後けぬ危る一て後も重く成事水と字子立飲食の致け
 有一校懐く何れ何れ後ふさぐ物や何ると居居する
 小羅あつて一壁立此家あつけつたつ物たり一儂や持
 水ある紙袋一米の所ハ禁つあおらせんは校し白く

之を搦るに漸く米計合はうりも何んといふ羅田く至
 米まで田人の口搦を喜ぶは一はすれが後娘くすく禪ち
 恒はわらせと枝保あぐもを微量の俵年くるまを
 感しぬりさうや感年此子より勾堂へ巻は文よ
 去つて死変り拵珍して飯里忍びつを徳若却而よ夜盗
 へらりてて盗りれらとぐら清ひぬる能い入るき西も有
 屋起り仕合のたまを考うていられども是どとん掛らる
 月や大なり此聖あくあめり一は「盗」も酒がな海あめら
 惣月とおうして打卦中の手は隆徳材はの地又居らる
 いて「ぬすすれ」手搦も是う何変ちありと
 吾を海まんぬ屋一

の古老なる里時人いづく金博小水枝河り護城に嘉川
 赤里と称した里さうや「有てな北角おり」もや地牛
 「板屋やあく東くおるきまぐは」新く「鳴や櫓の
 音る北陸」某州の屋く「六月す種菜があゆ箱奴して後
 私法をかあく吳風絨とたあふ流の支考古水を駿して
 送まる文河り名く「流川費」といふ川流と返答の虫
 作く「吾唱を解く」是を名を合相掛と号は

言種百里 附琴風

言種百里の魚を驚く業とたはに旬虫此文は曰く我始之
 蕉つ入里一時の茅風といふ後雪中唐よまさうらそ
 二十六年又いふく蕉つ「松風仙風何り仙風を子世に

其に十一二歳の友あり後嵐使を命成文く廿一歳
百里と改む今日又對候で能落一日と絶する二言の夜
すまゝ一残くばらぎに精上依極門戸後世一象はる一
羅起りり觸離治徳道して云く觸離の何ふそふ又ゆるを
其後茶拵ての後と是よりして其れ終入りり此子家
寫ぐに調理を能す其作れる物その肉を身作り
るに拍ちるまゝ一宿我舎して弛変す候は酒の烟人此室に
取り一定る時ハ終日終夜といへども其御を多うくすと
其香後りて風流なるり又新の如く享保十二年五月
六十二歳にて死に辞世一死ぐ壺で凍き月を足るどろし
其子其末子すと種波何里を授けり一巧あるはと後世人の

阿そふ妙双して後晋子に後と學ふといふ如羅架と号に
其末子其末子と号する柳の家一室を食やいをけふ此子ふす後
ら候一猶此其氣とそふ其氣長かり一買貯又すりる白紙
其あつり尚時琴風百里と並ぐ稱せり候考く有る
俵里病が死に辞世一息は此味いと表れり

深川源十

源十ハハ戸村人晋子と後く業を更く初め深川と改
より代く此我氏といふ幼なる時之選山といひ後老嵐と改
免又嵐肝ともいふ一梅が考やゆ記くまけめ井の邊
一志ちるる其意の意ちり一梅は益一後掛ハ母のをり一其意
其り家一徳坂の長刀何ふるを和歌く其此人容貌異体あり

落葉を以て露の書は尺餘身中を法衣を著し
 鹿守成擲くまに秋の怪のおまゝて平生
 その性冷然を好く天目よ酒一盞成以て度
 又抄むあり人その確く依り成るる事一
 六十餘年一して終り

秋色

秋の書は武江名人は下め照澤町菓子屋大目
 好ハ秋といり少くあり風俗のせは一有く
 妻と時のおまゝなり清水寺觀音堂に
 きてて「井戸端の横はふた」酒の碑も
 に切るおぼくも本くみ附るる信奇傳句
 新造の極りぬ後代まで秋色橋と名
 宜ちるばや晋子入りの時「
 遠く業成りくつとに翠葉はげく
 「このふのぬ禁もあるに女この
 幸比伽沙曼終年投湯一して
 家成主とにあり一と及後志
 用中晩年及ぶ湖十はを借
 侯の山花はるる庭園善
 吹ゆ色が父さいをひの折と
 修る一尺餘ありが折る
 樂我管一して送らせらるる
 學界ごとに用変のいつけを

父と入りの時「
 遠く業成りくつとに翠葉はげく
 「このふのぬ禁もあるに女この
 幸比伽沙曼終年投湯一して
 家成主とにあり一と及後志
 用中晩年及ぶ湖十はを借
 侯の山花はるる庭園善
 吹ゆ色が父さいをひの折と
 修る一尺餘ありが折る
 樂我管一して送らせらるる
 學界ごとに用変のいつけを

伊家奇人談

繪真事
真



伊家奇人談

卷文下

七

海この竹子笠うちふ里裾言く引阿げぢも又流く阪里
 都多若交りありありとど生孝りて板ちるる大率
 此類ちり享保十年四月身はりりぬ詩世一尺一愛の覚
 正色色はれれつは

紀文初子

紀文江戸の人回苗紀修玉屋又たつる紀の徳種の産はり
 氏終く出てより以来父子ともに古く安り成り又徳種
 多しんて晋子りて学び父を教ぬといひ子を山といふ
 「人のちど松字沖の枕り」馬くや年の種どもお同ら存
 教ぬは向「えり人す老の眼や古用千五之集り」千山新宅
 雲舟の待りよる角「陽又巢を築きおそぬらん」又るぬは
 意徳地遊具のみ刻々々々空風協何るる我種を

櫻井吏登

櫻井吏登江戸の人嵐叟に縁くはあぶ周竹とその言
 才とるがあ小妙若及あ小を点市を附与せら高はりの
 こと已院り「菴た里とる」伊ち之茂堂は懐る園く此
 子を認め雲中二世に神免人左おと班象ともいりり
 嘗て衆の幼よりありて苟且に山嵐雲といひ一が種赤く又
 吏登に更む老後深川也徳れ菴りト居き一ひり五二
 校を委ねたみふて出代つと枕を垂バ実には掃を容るの席
 毛衣一「客来く徳海村をわかれと對る人入まはる何と
 はず先の客いつる杖持く入て風信すと奈んいつくも
 小いうも清一雪風韻の幽玄なる尚時又和す侍者あく

實小陽春白雪とや稱すべし一子に幾多の詞を裁りて句
たしと教筆の源系を棄去て唯十八系成撰びぬると
奈里「梅咲く何より小春のちりり」大竹やんとの句
に記す六月「冬すくはぬいほのくと明あがも」老の秋明
の句を愛おもふ所さ又自像自像「おく霧や何ふあれとの
古茄子室曆四年六月廿五日成りて卒す

水間沾徳

水百次宿高の江戸村人その磨工とて一耐あり能書を好
ぶ云成沙とて杉原の風虎と沾二公此は例も列里一
一年 飛鳥井種孝に和尙の夏ふより奥の岩峰く左近忠
時 空路公との厨窓を慰まおらば此は例の考成撰にせらる能
如何に能と能の抄りしり流るるを進る者何れに便する者
片ましくなく此は信屋空世判髪きり免く若成友母と改
彼は二年ほど砥所ふたきりるる又夕は例ふ信く和尙此は
古き夏友と得ふく存世ととと福ふく帰活一玉ふり
友母むむりて因りるハ油りちりし和尙ふりしはちり
只能得抄みを修りす屋一と生生れちりしり清徳此才
何れりまんぬ一と直ちふ露公の教を交はしめ露ふといひ
後沾徳と改む日く夜く小上達一遂一風成記一享保の
法をいふを以てせり時水り合飲雲と号に「えむと核人を
尺の張り系後西村の何れ核人も難煮を喰く又何れく百姓此系
の法
や極意「法物何れと魚」て網籠の意「水と羽と合ゆく極
夕すもみけ人能出とる」在巻一鳥加ふるこて餘朱餘毫揮毫

其城已知あがらるるに及をわの獲猪たるは
 其時の口号一程や布面はよりわらぎは是より布面は人
 此呼けると奈少回所一碑城建く東澄居士と句稱
 其形跡の違ははりりはわたり此夕城以を命稱とる
 原一これ送云ちる皇統世今日と子尺奴世の振は衣ぐん

立羽不角 附辰角

立羽不角ハ江越忠人あぐりより不トグフ小入り松葉
 小して雜髪せり其時此句一け一城立本の端でなり一其の端
 松月堂と号す虚雲祇南南舎ともいふは千尋と稱する
 つ子子人よりはゆるよ皇姑名あり虫と得水小學び画ハ獨
 立一と句ら宋む初め家号一と皇一附嘗く冠里公の法鑑

松

葉

立

羽

不



千公羽畫替



阿づるを召れ去りて奉りりる生年姑及公御政の織り
 補せられ申ふのちは存候斜方より寵遇化は是
 或時公「笈比夜や長居をふく子孫まに戯れの由候は應
 「改の齒を立に加へてありたはせはせよ遠く御新
 よく次才小繁留して旬ら千金富成爲王正徳の初久童
 御より演術く特也する時徳才は借貸を序附てとあ出

「六月の晦日家裁ははらひる石となく京橋邊へ地変成
 来く後居は折居 官家より江戸中の居宅成丈古落
 進よお居へて清洵河より使ちる旨お後ひ志くり
 落進ゆ成たりり裁極をなく歎嘆して数年著述書出
 阿お成失いぬ持まども有破海キよくんお答今世にけり

南飯倉町小河家の書子と志持姑は氣雙むつりて
 出ましと依を満く「延王火下いぶトクム」て洞かお又「けむい
 め成すれは安泰地故きう家終り」おと書家久房く八十
 在るつて卒ま至とど晩年居候御流橋つか又移す其に
 變風して一流をたはは是代化多と稱す皆人の知所を
 宝曆三年六月九十二歳の高を流し小禱世に御流の素方の
 裸り返りけり

○大高子葉

大言子禁ハ揚陽赤城北士燃亦我流徳小は京娘一日小居けり
 いざ祭られう山樞一初より江戸北赤子と四季の汗並角
 今や小の増世をうりる人北白成集る小「短天又新大名や

四馬五羊六龍七雛九雅
轉

番勝 懷紙勝



九思

三月四方木也

鳥

一點

山

銀翊

一點二半



金羽

一半

魯



雌禽

二

乞之存修字

一日長安花

松色

字子



萬國三冠
三拜見旒

珠 蜀江錦

乞之志



買

金綺 吳綾



龜背

王鳥羽



魚



非家奇人談

卷之十一

十一

俊 龜背 小前

回雪

五の

米 大極

新月色

次中

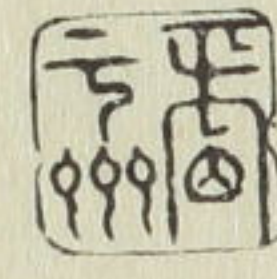
長 蒼溟

同文錦字詩

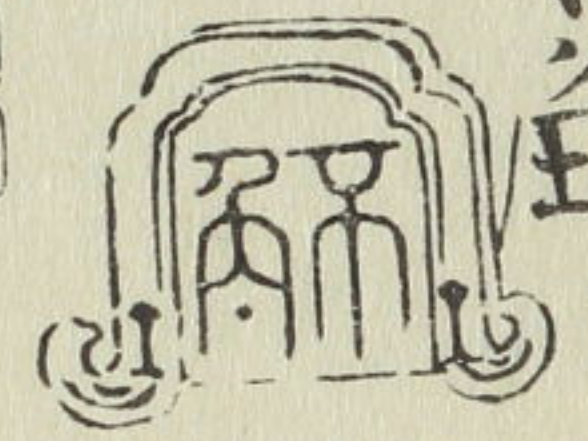
田十 榮 榮 六

豪 龍漢

花影上欄干



田十 榮 榮 六



師王

鳳

師王 鳳 鳳

年時度



龍



生枝玉

花兒

春

入王位後多勢代殺害一此曉ぐこ小西門出て引流
云姑く去依よと掛ハ光日春帳グ澄里一銀句の意すの
口人とも必ら良申に洩候ド己湯一毛入らずを形ゆを
直一了言繩は針里或酒舖に入り名記一標を返わら良
才何り今路あす全小倉卒此子ゆ急價ハ持来らず後ハ
お園ちなく拂屋一を賃とて此羽織片一並をありこ
何某候より押飲の物ぬひで巻一己を泉岳寺此つあ
いたり言候はけ中一に氣喪候や此度は大き度や在候
蘇河よわらせし一連せてふと叫りま 寝家あり
教護此武士何あこ某里門戸我笑く入ば里りる後すん
なくしてつかよ知う人一がそ深切や通ドけん申小知家
人何あり大に感ドそ怪捨並好よ辱ぬるの存アス候

風せし右佐の言を我れ諭り取返何某候の由籠又候る至殿
 やは産屋に中よれバ子産出前ある何用至里やと内居に
 答へ今取立りく此等又て由級附の取柄を質物又入産
 申急お急はこぎけ中よ産ありと汗汗赤りして居る至
 殿いさしく思へたその旨実ある我れ秘儀一玉つると至
 又或時産分此句さて一何某も取柄分たすいふ十二文字然
 後より然れどもよ此又至を産産産産産産産産産産産
 来里に産分けける小村いり野分の意は十二文字又て
 取より字教合内とせば二候は産産産産産産産産産産
 依之十二文字して産分此一句を定りや此人取後又つ
 子その遠出小取柄して産分産と名一と是ゆ急赤り至候十
 二年九月十日又産産産産産産産産産産産産産産産産
 豊王十三夜

活井舊室

活井旧室の江戸島人梅屋の風代幕ひ能清に親練なり或の
 聴取坊ともいり身の丈大うして人姑もいり之を憐る世
 云物材と稱せし依之性産小は我れ好む一日碎果して或取
 細家の形小立寄るるが面必なる小必ひ産送場くあらめ紀
 にく砂と試合んる我れむむ砂も至密練のぬく候一き
 我感一あり言身と立合一む室何の若くなく打すな
 られ官ち立あ人を扱出して一夕立にうこれく把る田面裁
 皆去ま我れなく石掛樹ある村ありこは我れ掛く知心
 うこ又その風産何るを産一とらや若分此衆かあり取る
 片或酒産より酒のせよと取れども豆粒のいとぬみ多

園交里一々やはふりとふお煙ありいづま室怒あぐそとそお煙出
 遠とほへても喰く物の奈な一おの鬼おにもか或年あるとし此三この路みちに日本やまと絶たや天
 地ち一枚まい河かけのままああく孔子こうし忠ちゆう賢けん聖せい年ねんをままれれとくく一いのひ出
 ととははいいくく新あらた迦たのつ賢けん一い蓮れん此この実まことのこららんど変かはりの新あらた文ぶんううああららは
 氣きああるる家いへ大おほ率ひら此この新あらたなり

梅雨

梅雨つゆのの伴とも歩あゆみみ人ひとははどめぬぬ息いきをを奪うばへへ業わざととななせせりり生せい珠しゆ燈とう
 猶なほ我われままははんんでで非ひ風ふう簾せんとと号ごうせせとと古こ老らう守しゆ武ぶををままささひひ一
 衣い係けい屋やく一いそそ附つ合あひひ己おのがが長ながずずるる雨あめありり一い年ねん如ごと別べつはは旅
 せせ一い日ひ金かね泥どろふふててののまま句く一い破やぶ道みち中ちゆう件けんおおももるる時とき一いつつ雨あめはは
 けけくく舟ふね此この休やすみみみりり何なにしてして何なにるる又また一い刺さ刺さののああれれとと咳せき氣き一いて
 字あ多おほ小こ雨あめははああのの河かとと稱なづききるる水みづ一いととありり是こゝよりより加
 陽やう比ひ能のう階かいああ道みちふふああれれ半はんのの梅うめ雨あめがが風かぜにに愛あいすすとといいひひ後のち又
 涼すず袋ふくろ世よ人ひと我われ妙たうとと一いそそ附つ合あひひのの旨しよ意いををほほるるううりり今いまをを集あま
 園けするるにに一い日ひ妙たうとと十じゆ日にちのの葉はとと淋しみううててととあるるにに一い巻まきつつ紙
 無ながが来きてて居お係けい又また一い玉たま物ものふふりり中ちゆう妙たうととはは懼おそれれとといいひひ
 一い使つか者もの一い通とほりり清きよ盛さかででいいひひ又また一い麻あ布ふのの灯とうりり紀き壇だんててとといいひひ
 小こ一い米こめ櫃ひ入い河かのの梅うめ雨あめいいれれててとといいひひとと何なにもも強つよがが附つ合あひひありり又
 等ひ比ひるるのの跡あとをを一いとともも句く然しか又また得えるる雨あめのの滴た替かああとと稱なづき
 すすとと一い

平理臣人

平理へい臣しんははどめ免めん竹たけ雨あめとといいひひ後のち臣しん人ひととと及およむむ江え戸こ人ひとをを角かくと
 後のちくく後のちああららふふ中ちゆう出い系けい河かにに移うつ住す一いてて野の田た畝うし三さん号ごうにに住すくくと

多と流麻の本芽う赤気蒸存蔭脂花の竹三曲を奏し
 二我回うは「必麻や風吹く云北川譬喻も此名ぬく亦
 何と婦人や「鳴あぶ河越に蝶の目軽う赤鴨流條景眼中
 小在り」世名を海や親世が響雲の中 陰を移奇「夜
 づく淋は初る時ぬり糸一理ちや時直まつり」此の語も
 二句とも和乎言種その老後を武形くぬり取事言しと
 号一法名を宋阿といふ嘉保二年六月死に年六十四有六
 禱世「あーら〜く有ともまら〜西の翼

堀内仙雀

堀内仙雀と武形の人活漉を少とに室永中 京洛より
 羅人と名を号しは化箇致と号し又長生庵とといふ「弱子
 此朝職部の新創と親名表「あゝ氣揚ぬは風吹くあゝ震るは
 今や引く鼠士此裾跡の垣半此句我 邦乃大漉哉は譬
 喻せり稱嘆をすんた有るうはけ人榮子を嗜むた
 器哉電す此此癖何至又戯画を能すを奇巧むり此
 立圃許六もたはしく減むはといふ巻小巻中抽づづ此
 事あ亦財をす茲哉忍ぐいて必く禱る是を画及筆以ふ
 徳宗皇帝のあり又よ水りを又うり何ま〜く種あるる
 人此及びげる所なり要延元年至十月死に七十有四歳

○千代女

千代女を加州松任の人少小あり支考のつ小拵考死して程
 重内を得ず或時美濃の盧文材形跡して来水る形
 是此旅高小熟くお入し才子と名画の越の呉俊明

乙女

乙女の

乙女

乙女

乙女

乙女



上よりなり或時画越よ小漢を下にこ隠されく招聲の画

西をよく画くそ下小招良や此も信はと成何ふあぐりこ

そ即妙きんぬ屋一始く交はるる時信成約今日何あまめで

乙女初誓至我子成夫ひりる時信成約今日何あまめで

乙女初誓至我子成夫ひりる時信成約今日何あまめで

乙女初誓至我子成夫ひりる時信成約今日何あまめで

乙女初誓至我子成夫ひりる時信成約今日何あまめで

乙女初誓至我子成夫ひりる時信成約今日何あまめで

乙女初誓至我子成夫ひりる時信成約今日何あまめで

乙女初誓至我子成夫ひりる時信成約今日何あまめで

乙女初誓至我子成夫ひりる時信成約今日何あまめで

乙女初誓至我子成夫ひりる時信成約今日何あまめで

乙女初誓至我子成夫ひりる時信成約今日何あまめで

伊家奇人談

卷之十

十一

かの時傳傳はらんちりといへども此傳境よりの少少

山口羅人

山口羅人を地牙教と号に又由射山ともいふ若く重一河川流
澄子後屋全後一感破して長風を起す嵐山まで一書
切や若此人の初櫻「身中」洞をまほはに果て家「竹」も本も
人北後阿る種多う家「重」名目や年江に後も皆ゆふ伝え又
の法於鄙北能成武司唐に會して一昼夜多句成備ふす
後又号成改く老種富とのみ地牙北号を記くつ人羅江
ふ阿ふとちり此子は「め」格屋意田宿とのりる虫蜂亦り
素より家室といへども天性財務不疎く足元又衰微一
業成廢一と此邊子入る地牙といひ羅人といひ重下知
ぬ一室歷二年五十四歳一とて卒一家

横井世有

横井孫左の尾陽若古屋の室屋なり性淳朴にして文種
を好む能傳くも長じて世に獨立に於て人亦傳くはく
我は能傳北河なり又つ人もなり一唯正妻あり小兒の台云
とろふ云いせざるがおつらうと又七又二かちふ一と能名を
世有とのみ松風北里何妻までむつ歸り一生始の神傳引
能の教「昼」良やとちら北河も石も合は「地」能いつはて是
かくゆり一年松本流るる区を字ぶ主人成慢ると傳人交
初く對面して一仙物の重新なり相をばふを誠んあふ
るも大概は此歎あり又述する所の語ありも浦北梅種又法
小皮靴等の能又その実体して鼓舞自在なる比類
ちなり一先哲を改く之を稱せり今もこくを世に捧

はす求むる如く其人の風流を知居

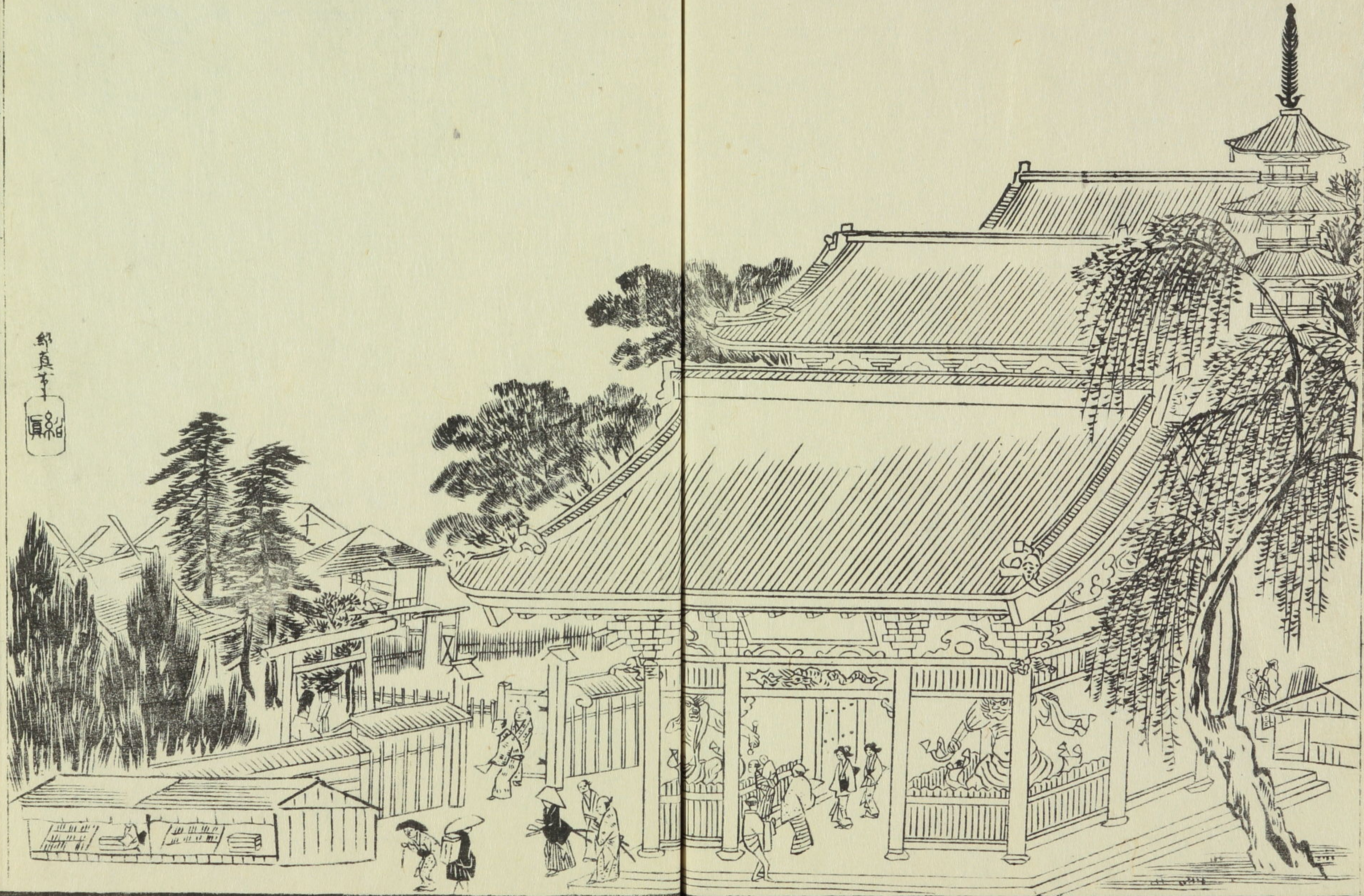
清水越波

清水長之助はどめ味曾あるなり又風流の志河内と
 仰ぐ又己が業成敷ふ一日俄に藝おろしと家紋の巴と長
 此字を合して長巴と改む折姫一喜嫁が伴く付ひ折ら
 瀧おどろいて油河のゆゑおまを深まといふ水白やと管の巴世榮
 此うほ片くま彩のぬちりやと管の深まといはく岩の産ちを
 藝を岩岩んふふと今油が方をはう高の徳借ふぬあるに
 業が傳へし後お居しと使ち矢依が可く達ゆ記媒してつ
 んとのおおふりり徳が居る所おも違ふは違ふ一世の作者
 とある越波と改名して揚歩庵と号し「水香に空はけを
 物生草ふ枝河りゆわ即色是空空即是色色空空色を
 二重おありと此とま人里別衣うふ記略や記の血をば臭きと
 山此いも茄子田糸に作懸生りかいらんと字咄し一露耳入
 て二端おしと「河名びや踏く河がれが初里とくはえ又五年
 三十六業けく死せり

建部涼伝

建部涼傳あり吸露庵と号し初名葛葉た里一時の野坡
 後ちふ後又清の百川がすく冬ふ從ひ親向を賀に招く
 希國は終記附向の勢ふ起く梅語又依る二年水屋に在り
 時を建部ともいなり武の清屋に居るを却りてあり涼伝事
 奇風神の袋屋を我をその改より徳借を屋めてれ名我後傳あり續
 ち或の妻は世附り序ともいなり画を好く字と禁教の号あり

卯真子
真



赤里と若つる人ふ答く「**備**をある身におのり都合あはれに想ふおもひを
 難波のあはれ抱めふりー逆懐さかくー我形わががたをあはれ恨川うら風かぜれ糸いと栞しり越こえ
 玉たま裏うらみみ新川あたらといひー女おんな何なにりり打うちくくかかままひひあるある男おとこ何なに理り
 二夜ふたよそのその前まへららでで懐なつかままららににぬぬるる我わが打うちくくみみくく「**新**水あたらののつつねねと
 おりやおるる若わか者もの若わか来きれれ抱いだめめ何なにぐぐー感かん時じのの吟ぎん一ひと思おもふふとと積つりりとと
 此このの心こころににああららるる系けい何なにままのの所ところにに婿むすめ妓ぎをを里りんんああははととのの人ひとるる若わかままの
 実情じつじやうをを吐とおおにに我わがままののままをを曲まが輪りん成なりいいとと世よにに中ちゆうおおちちくく若わか者もの
 「初はつ音ねやや淮わいのの珠たまももささのの衣え若わか同どうくく意い「**友**瘦やせとと人ひとははままののままのの
 洞あなのの心こころををのの程ほど情じやう何なにるるいいままももとと後のち容ようよよいいとと強やくくどどおおゆゆ人ひと
 信しん家け

伊家奇人談巻之二

おほよ我われをを古こ人ひとののままててきき家け趣すゑをを志しとといいててままののたたららひひ我われ
 何なにのの免めんりりくくああそそぬぬりり實じつりり古こ人ひとのの友ともととんんとと
 心こころへへー一全ぜん心しん集じつ撰せん集じつ抄しやう隱いん逸いつ傳でんななととみみななそそををななりり
 往わう年ねん花はな活かつ子こ三さん熊くま海かい棠たう氏しああままてて閑かん田でん老らう人にんはは
 筆ふで故このの里さと崎さき人ひと傳でんをを編へんををああららははししてて大だいりり
 世よににりりるる佛ぶつ家けももままととそそれれ人ひとななららむむむむややととくく
 玄げんとと一ひとととりりのの人ひといいととみみそのその例れい子こかかららひひくく佛ぶつ家けはは
 奇き行ぎやうああるる毛もうのの文ぶん明めいよよ里さとののかかとと八はち十じゆう餘じゆう人にんををああららははししてて
 ぼぼとと子こ望ぼう右みぎのの友ともととななすす此こ人ひとのの明めいをを失しははららむむととんんとと

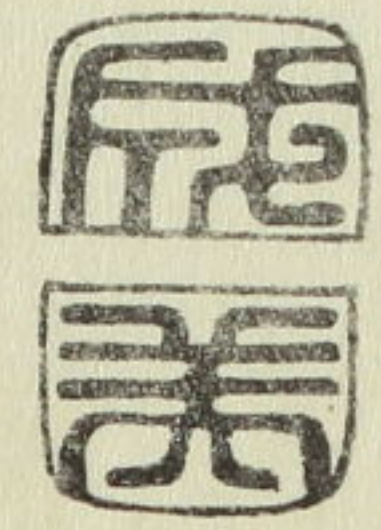
りすくなくといへどもよく古人はあふ鑑
 々からあつてその撰子及ふ尋常明眼の人其
 心識もかまよはせるといふ處もや古人は
 よくさるるりけ人なりんを難うあへるかの色をも
 香飯も乃梅のそ形ある處もそ子昔く子校正
 上木くそ立母披あすまこ人故このめあつり
 につくかつ孝善れ志たふと心へ一朽人まき信り
 語後そへあと氷黒主人より中かくらる世に風雅
 をとちのあふものば見るとかなくも吹塵を

一のさ訪て勝敗母のこいさくあれ親の編集あるを
 まるんこれ三子はるるる流俗な出てきらかは
 風流なはくま侘ま子た心くまきありありといふへ
 つき請て是をよみ上件り人くれうへよきいん
 大の三子乃畸人をけりといふへく於ほ由

丙子春

豊久賦録

不隨齋成美跋



豊久賦録

玄玄居士田舎傳

男 喜喜 述

先人竹内玄玄一を據湯字熊小生依成臺に於て禱ぐ
 成未ふ耐一 同玉加古此を了ちる人の能落へ導くんと
 折ふふ好てハ勅らま一り守守壹壹名色を足るるり
 たいは何を思ふとも甲斐なふりんと答へ一 成たお思
 ひを尚書小いをばや唯心と獨里心眼の能あふんまを揚
 はちのぶ若れ能する所奈 成屋一とて一 成よてアるるみる
 ちのり月の色と喻けま一 句に感激忠らあり 曰者ゆす
 向く風小致るくと振附くる里張一 千里と一歩あり 起
 るとりんばん掛たふん又奈と云傳変小致らばくめや
 直ちにそつみの一 神原やあれ掉に成り柳よま置と
 一句成吐一あり 性く小殺多の紙筆を替せ里お

我傳わがつとず一々妻女家望さいにょけをりて和漢の傳でん記き或後おの一む是
身み此こゝ不ふ似にを顧りばなり始はじる東武とうぶく来てより人の困窮くわんきゆう成
救すくふ子こ所ところ亦またありに故ゆゑよそ身の浮遊うきゆうも亦また交好かうこうも或あるいふ
若わき金銀きんぎんを借かりく契せ人ひと此こゝ費用ひようぎんも極たぎはるつらつ徳とくていふ
有あ餘りを換かへて不足ふそく成な補おぎなふ天あまの道みちなりとそぞん懸く較くちある
おと此こゝ若わぬ一文化改ぶんわ之の北きた年中なちゆう秋あき廿にじゅう五日ごにち成なりく物ものあり
享年けんねん六十ろくじゅう有あ之の谷や中ちゆう長ちやう久きゆう院いん小せう蘇そ依い

春日有感

庭裏有梅先人常懷故詩意及之 儀伴散人

忽た逢た世上物華後逝しよせ者如斯しか歲月出庭際嘗聞言しやうか送送
中徒見ちゆう詠餘えい辞梅うめ花はな似に雲閣うんかく空地くう地ぢ清きよ雪ゆき若わ梅うめ感か舊くわう時じ無な奈な
窓前人まど玄げん裏り春風令しゆんぷう編憶へんおく支離しり

賦以寄竹子得

玄玄府君與余有舊臨別猶舍宿草是慙

賦以寄竹子得

南鑑 勝謙

孝子其何似ここう周しゅう鼎てい恩おん堂たう平へい敬けい恭こう素そう梓し送そう次じ唐たう風ふう響きやう聲せい遠えん行かう
傳でん時じ俗ぞく纂さん編へん肆し世せ名な因いん君きん追しゆい慕ぼ切せつ此こゝ倭わ比ひ躰たう鳴めい

題佛家奇徑

水戸 森庸軒

父遺ちち此こゝ書しよ子こ刻こく之の風流道義ふうりゆうだうぎ具ぐ于よ茲こゝ詩歌しか不ふ及た俳諧はいかい妙めう技ぎ卷くわん
直達ちくたつ花はな月げつ師し

ちちを我失くしける
こゝの玉ありし

竹内重躬

申まをくま今いま夕ゆふを逢あはせてお祀まつり魂たまや時とき日に増ま添そはる此こゝれ教しよく
そ此父の遺後いごは重躬しゆうこうぬし

江戸 塙捨技

お祀まつり一ひと云いれ禁かぎ竹たけや末すえをまくまなき人ひと思おもふ種たぐひをま依よらます
水戸 岡田一琢

なき人の云れ禁かぎそくくく思おもふとや刀やいば一面いっめん軽かろく疾はやく得える

言勝

菅谷正正

十年阿ありみー面うげと露北君に月白るゆく子持あ若
言勝 岡田光令

安樂院玄玄居士

牽牛花や

玄月名は

又の

初めつけ



書卷 正正

うらむいて尺隊阿里あけ代席

玄玄男

音音

露北君に十葉阿ありの秋うけて

玄玄妻

不英

短奇形下略

お北世茂玄里ーたらちまの云おける文ども、
六巻の字紙こい成ぬ初あ夕あ又考へ侍るとなつりー世
いやはー画ゆたー年月や竹のふーぐふ積隊思ひ
は屋十ああり三とせ北君も素んぬはれは医北才子
れー晋子ぐいあみま阿ふんずれど能落すけるそ志にめで
素ありお減ゆる者又等く諸邑風客君一句成意
あや榎林の二枝崑山北行玉りーく其衆一の方向やつ
かまぐ草あみごとく之にはほさふんじ
あさぐねや子居の竹はほそんども

音音

水石水が多ふうげ何り秋のうせ
人此身に葉の上風おぼるゝ家
葉舞や利休が如きと飛香川
春の秋のおとふりく海小雨の家
幾節一かみのすきど及の葉
露が抱けの掃人葉ふり秋の葉
此れとぎれ虫のさだまりや水のおと
お良や水と流る種のおむけくは
露や露十葉あは里に石のいり
と掃やま何うの心を今も嘆く
いふづまや岩よるうげく波の中

同 二世 乾什
同 二世 紀遠
同 三世 堪寧
同 三世 冬暎
同 六世 佛外
同 二世 永棧
同 同 百葉
同 同 龜貝
同 三世 平砂
同 浦 逸我

我の肉の煙りの人お秋のうせ
古ふおぬ厚うや移れう月と一き
葉此葉やあつ一に葉をちぶさむる
たゆりろのちふ戸はらん秋の月
何さうして今日の葉さうど本様ぐは
阿さぐわや葉を一つ日葉をたはし
たなが一への葉さうて文よ初まぐは
おは麻やほびも葉をうりも移葉の
雨戸まで葉らす家や葉おろをあ
葉すくき文ぐれぐこのつらぬま
けさおでもアさや厚を月此葉
葉ばあ一の葉まも葉を海と截

同 同 葉龍
同 同 雲雄
同 同 定種
同 同 月長
同 同 菊和
同 同 菊淵
同 侍部 丘高
同 近江 烏頂
同 河同 葉龍
同 尾張 菊輪
同 同 竹有
同 三河 草池

名存や思もつらまによもすら
 めるも存れわくらば者ぬ屋
 山里やあごせちりもななは
 極さ記の何るるありぬ屋は
 山北井の水汲よあそく葉のは
 宿く起て手柄が師やけさの
 申しくみ人もむおぬく秋は
 いうるや遊ぐ帰はあきさの
 寄れおいでんてくれんどう
 七夕も敷でわちうは秋あ
 書ややそりーさむき舞が
 あり記や起く仏をさぐは
 米多く描くけびー記は
 舞の形をさうするを
 虫をたまでおぬ屋のた
 秋のなつたやすー出の
 魂をたよあはせ強ひり
 お手はあもあうぬと相
 稲妻にかさくはと麻る
 いあつちや獨りおちく
 附ていふ法玉英士の秋
 降多ふはの秦胡道
 以てれや忘るあり

同	甲斐	同	越後	加賀	信濃	同	お橙	下忍	あ房	陸奥	南紀
秋琴	可記屋	嵐山	鳥喃	耳谷	素葉	一葉	葛三	太節	松長	乙二	素江

米多く描くけびー記は
 舞の形をさうするを
 虫をたまでおぬ屋のた
 秋のなつたやすー出の
 魂をたよあはせ強ひり
 お手はあもあうぬと相
 稲妻にかさくはと麻る
 いあつちや獨りおちく
 附ていふ法玉英士の秋
 降多ふはの秦胡道
 以てれや忘るあり

同	因幡	豊後	長門	肥後	安藝	松前	薩摩
平南	雷沙	月化	鞠風	並竹	等老	布席	潮雙



蓬盧青青先生撰目

竹憲玄玄大人遺意

- 一 俳家奇人談 全三冊 出来 青青先生 著
- 一 續俳家奇人談 全三冊 同 著

八景園夢松先生補校
 編者 蓬盧青青先生
 撰目 竹憲玄玄大人遺意
 全三冊 出来 青青先生 著
 續俳家奇人談 全三冊 同 著

一 椿年画譜

和人物之部

全一冊

一 同 二編

人物花鳥虫魚 草木山水之部

全一冊

心齋橋通北久太郎町

河内屋喜兵衛

天保十三年

大坂

壬寅孟春

心齋橋博勞町

河内屋茂兵衛

全志發行書林

江戸

小傳馬町三丁目

丁子屋平兵衛藏版

